

392
183□



始



C
165

古事記神話

の研究

右川三四郎著



改訂版

A

MES CHERS AMIS

MADAME ET MONSIEUR

PAUL RECLUS

EN TÉMOIGNAGE

D' AFFECTUEUSE RECONNAISSANCE

第一版の序

本書の目的とする處は、本書の名稱其ものが表明する如く、『古事記神話の新研究』を試みやうとするにある。其『新研究』の文字は些か際物的に聞ゆる嫌ひはあるが、本書の内容を表明する爲に『新』の一字を加へたのである。本書を一讀する者は、先づ其主張の甚だ突飛なるにショックを感じるやも知れない。ケレども之を精讀翫味して下さるならば、著者が極めて眞面目に此研究に努力しつゝあることを察知せらるゝであらう。

著者は本書の研究に直接に意を注ぎ始めてから、未だ一年にも充たない月日をしか之に費やして居ない。又、其間にも亞弗利加から西班牙、佛蘭西、白耳義、英吉利等を旅行し、更に日本にまでも渡航して來て居る。さればコウした漂浪の生活を以て居る處の著者に大きな纏まつた研究の出來ないのは當然である。本書が極めて

断片的のものであることは茲に述ぶるまでも無いことである。

一九一九年十二月、私は舊友ポオル・ルクリュエ氏と共に、同氏夫人マルグリット氏の病を療養する爲に、三人にて佛國を出發し、モロッコ國の舊都マラケシ市（モロッコ市とも稱せらる）に着いた。寄寓せし家は、ポオル氏令弟アンドレ・ルクリュエ氏の宅であつた。宗教史の權威エリイ・ルクリュエを父とし、地理學の泰斗エリゼ・ルクリュエを叔父とするアンドレ氏は、矢張りコウした種類の夥しい圖書を藏有して居た。私は此家に六ヶ月間滞在して、可なりに多くの讀書の時間と、研究の便宜とを得た。忽然として私の注意がメソポタミヤに傾けられたのも此時であつた。從來久しく懷抱したる古事記神話の疑問に對して、電光イナヅマの如き明光が投げられたのも此時であつた。ソレから私は随分諸書を漁つて太古史を研究した。元より此短日月に纏まつた研究の出來やう筈はない。其内に私共はアフリカを出發することとなつた。如何に手を盡しても便船を得ることが出來ないので、遂に飛行機にて大西洋、西班牙

を横断して佛國に歸へることになつた。幾ら其れが通常の交通機關になつたとて、是は私共の最初の試みである。多少の危険を感せずには居られなかつた。私の生命などは假令此まゝ、大西洋の潮底に沈められても餘り惜しい品物では無い。併し、小さいながら一つの發見であると思はるゝ此古事記研究は、此儘に葬りたくはない、と私は考へた。ソコで私は草々としてペンを執つて私の研究の結果を序述した。そして其れを巴里在住の一友人に送り、若し私に不幸があつたなら、此研究を承繼して呉れと言ひ添へてやつた。其時に送つた原稿が、即ち本書の過半を成して居る。此の様な筋道で出來たものなれば、私は参考として日本の書籍を有たなかつた。加藤高文といふ人の『古事記讀本』一冊の外は、悉く西洋の書籍のみに依らざるを得なかつた。私が今度日本に歸つて來た原因は、其研究に要する日本や支那の參考書を出る丈け多く蒐集して佛蘭西に持つて行くことであつた。そして私は此研究の結果を佛文に書いて、彼方で發行して見たいと考へて居た。然るに私は今俄かに渡

歐することが出来そうにも無い。食ふ殿の建立に追はるゝ身は悠々として呑氣な研究に没頭しては居られない。不完全にして断片的ではあつても、成るべく早く此の様な不經濟な研究から自分を切り離して、パンとペンの交換運動に身も心も注がねばならぬ。

若し何人でも、私の採つた方針で、此研究をモツと深く、モツと廣く、モツと正確に、擴張して行きたいと思ふ御方があるならば、私は出来るだけ相談にも與かり助力をも吝まない。私は同志の士の多く出でんことを切望するものである。

大正十年二月十一日國民祈願團が明治神宮に參集せる日

神田鍛冶町の假寓に於て

石川三四郎識

第五版の増補に就て

第五版を印刷するに當りて、本書は百餘頁の増補を加へることになつた。是れは私の研究の可なり深い進歩を物語るものだと私は信じて居る。始めて本書を上梓する當時には、私の智識は尙ほ漠然として精明確實を缺いて居た。然るに其後少しく研究の歩を進むるに従つて、私は益々自分の研究と發見とに驚異感歎を禁じ得なかつた。

私は一昨年末に再び渡歐することになつて、新らしいドキュメントを手に入れることが出来た。殊に楔形文字のバビロンの古文書は、私の研究に新らしい光明を投げた。例へば、古事記神話の創世記がバビロンの創世記に髣髴たること、「黄泉國」の思想が矢張りバビロンの古代に行はれた傳説であること、日本の國風即ち三十一文字の短歌が希臘より由來したといふ西洋學者の所説が誤りにして、太古のバビロ

ン人は既に盛んに同形の讚美歌を口唱したること、等の如き発見は即ち楔形文字の
古典が私に與へた主要な賜である。

又、ニニギの命及びホ、デミの命の結婚と全然一致する記事を基督教舊約聖書中
に発見したること、ヒツチトに關する多くの研究材料を手に入れて、其文明と天孫
民族の文明とが深い關係を存する事實を発見したること、等は私の研究に取つて可
なり重大な進歩である。

私の研究法は元より素人の其れである。其道の人から見れば定めし無謀な企
てに見へるであらう。乍併、私の様な素人が而も漂浪生活の間には是れだけの研究を
進めて居るのに、専門の歴史家や古典學者が、今日尙ほ昔ながらの國學の奥殿に居
眠をして御座るのは、今の世の中に珍らしい怠慢と言はなければならぬ。私は、
世の多くの資力と時間と便宜とドキュメントを有する學者先生達が、速かに其惰眠
より覺めて、奮勵一番、此新らしい研究に指を染めて下さることを切望して止ない

ものである。

一九二三年四月十六日櫻花爛漫たる瀧野川中里の寓居に於て

石川三四郎識

第六版の増補に就て

本書は昨年春第五版を印刷するに際して百餘頁の増補を加へた。其ことは前掲の序文に記した通りである。然るに今度第六版を印刷するに當つて更に約四十頁の増補を追加した。即ち第五章『海原の國』、第六章『高志の國』及び第十三章『大弓(夷)民族』の三章がそれである。

實は今度の増補は最初二百頁位に達する豫定であつたのであるが、何分俗事が輻輳して來たので、落着いて研究して居られなくなつた。それ故、甚だ杜撰な研究ではあるが、右三章を公けにするの無鐵砲を敢てするに止まつた。

本來、此様な研究は金持の有閑人が企つべきことで、吾々の様な其日其日の生活に逐はれて居るものゝ携はるべき仕事では無い。二三週間も此不生産的な研究に没頭すれば忽ち米櫃が空になる様な吾々風情の志すべき道では無い。モウ好い加減の

處で足を洗ひたいものだ。

大正十三年六月十九日梅雨當に到らんとする頃

瀧野川中里の寓にて

石川三四郎識

古事記神話の新研究目次

總論

第一章 文明の移住……………一

第一、海陸の兩路……………第二、交通の類繁……………第三、天孫民族の文明……………第四、兩民族の旅程……………第五、古事記編纂の時代

第二章 バビロン及びヒツチトと日本文明……………二八

第一、緒言……………第二、ヒツチト民族……………第三、寶鏡と太陽圓盤……………第四、小亞細亞のクマヌ神社……………第五、ヒツチトの遺物……………第六、風俗の近似……………第七、穗々手耳命とイサク……………第八、井と玉壺と高田ト田……………第九、縣主と國造とヤマト……………第一〇、三十一文字の由來……………第一一、ワニの意義……………第一二、陶棺及び大黒天……………第一三、樂器……………第一四、神輿の由來……………第一五、佛教の起原……………第一六、更科そば

第三章 太古西部亞細亞の形勢……………六七

第四章 古事記神話の地理……………七三

- 第一、緒言……………第二、高天原……………第三、夜の食國……………第四、葦原の中國……………第五、出雲の國……………第六、根之堅洲國及高志國……………第七、高千穂……………第八、笠沙之御前……………第九、築紫

第五章 海原の國……………一〇八

- 第一、古事記と書紀……………第二、久米博士の説……………第三、ハルシヤ灣頭の「海の國」……………第四、須佐之男命の叛逆……………第五、シヤルル・ジヤン氏の説……………第六、レオナアF・キンガ氏の説……………第七、暴動の事實は日本に行はれず

第六章 高志の國……………一三三

- 第一、古事記神話の高志……………第二、八俣蛇の記事……………第三、久米博士の説……………第四、注意すべき點……………第五、興味ある歴史事實……………第六、大國主神の乘馬……………第七、コセ人は乘馬民族

第七章 三大創世記の類似……………一三三

- 第一、カルデア神話と古事記……………第二、創世記の結構……………第三、古事記神話……………第四、カルデア神話……………第五、カルデアの八百萬神……………第六、舊約聖書の創世記……………第七、洪水の傳説……………第八、世界創造の順序……………第九、古事記の創造説……………第一〇、八尋殿の交合

第八章 黃泉國の傳説……………一四〇

- 第一、古事記の記事……………第二、久邇武氏の所説……………第三、カルデア神話……………第四、イシユタル女神……………第五、女神と四方亞細亞……………第六、アシラと柱……………第七、地獄思想の傳播

第九章 四ツの結婚の類似……………一七三

- 第一、四ツの結婚の類似……………第二、穗々手耳命……………第三、山サチと海サチ……………第四、エサウミヤコブ……………第五、ヤコブの結婚……………第六、ニニギの命の結婚……………第七、穗々手耳命及イサクの結婚……………第八、熱帯地の出來事……………第九、高田下山

第十章 日本短歌の起原……………一九二

第一、希臘の三十一文字……………第二、バビロンの三十一文字

第十一章 天孫民族……………一九六

第一、ヒツチト民族……………第二、天忍穗耳命……………第三、天石屋戸生活……………第四、ハ
ラン住民……………第五、八咫鳥と兩頭鷲……………第六、天孫降下の演筋……………第七、『柱』の
語……………第八、猿田彦神はカルデア人也……………第九、建御雷之神及思金神

第十二章 出雲民族……………二〇八

第一、天神と國神……………第二、須佐之男命……………第三、刺國とシユス國……………第四、大
國主神……………第五、大國主神ミアブラハム……………六、大國主神とオルカム祖神

第十三章 大弓(夷)民族……………二二二

第一、天照大御神の弓……………第二、弓の重大使命……………第三、東夷は大弓民族……………
第四、カルデアの弓……………第五、弓の移送者は何民族か

第十四章 バク(貊)民族の東遷……………二五二

第一、天ツ神と國ツ神……………第二、交通の跡……………第三、中亞の地勢……………第四、土地
の變遷……………第五、『玉の道』『絹の道』……………第六、バク民族の移住……………第七、貊はバ
クトリヤン也……………第八、コマの語原……………第九、熊野大神

第十五章 岩屋戸集會の神話學的研究……………二七〇

第一、冬と夜との徴象……………第二、諸神話の類似……………第三、オジリスと天照太神……………
…第四、鶏鳴の傳説……………第五、冬の神話的意義

第十六章 岩屋戸會議の社會學的研究……………二八二

第一、萬機公論に決す……………第二、比較的研究……………第三、最古最大の臨時議會……………
第四、皇太神と須佐之男命……………第五、萬邦の同型……………第六、母系組織の社會……………
第七、母系より父系へ……………第八、父命認定農業革命……………第九、國會議事録……………
第一〇、太古の國會……………第一一、イロキユアスの議會……………第一二、イロキユアス
聯合議會……………第一三、天の岩戸の會議

第十七章 劔と鏡と勾玉……………三〇五

第一、安の河の劔と玉……………第二、性懺崇拜……………第三、生殖器崇拜と諸宗教……………
第四、クリユセス・アンサタと劔鏡……………第五、舊約列王紀の事

第十八章 ワニの傳説……………三二八

第一、ワニは日本に生息せず……………第二、『ワニ』の語源……………第三、ワニの任務……………
第四、トイテムとしてのワニ

第十九章 天及び神……………三三六

第一、『天』の文字……………第二、『神』の文字

第二十章 ロアジ教授の意見……………三三四

第一、著者の希望……………第二、著者の覺書……………第三、著者覺書の原文……………第四、ル
クリユ氏添書……………第五、ルクリユ氏書簡原文……………第六、ロアジ教授返書原文……………
第八、洪水及び移住の記事

第二十一章 結論……………三三〇

目次終

古事記神話の新研究

石川三四郎著

總論

碩學エリゼ・ルックリュは其大著『地人論』(L'Homme et la terre)の初めに於て、
地理と歴史との關係を記して曰く

地理は空間上の歴史にして、歴史は時間上の地理なり。

と。古事記の如き太古に係はる茫漠たる記事にありても、若し之を精讀靜誦する時は、其間自ら地理的寰境の匂と光りこを感得することが出来る。生ける歴史を學ばんとする者には、アカデミックな考證究査は之を後まわしにして、先づ其傳説の上

に輝やける色彩と、説話の上に滂礴する香氣を感得して、直下に其地理的及び社會的寰境を了解することが、最も重要な條件である。考證は歴史の基礎的生命を握つた後に起るべき事業で無くてはならぬ。殊に古事記の如く茫乎たる往古の記事に於て其然るを見る。

須佐之男命の『八雲立つ』の一首を読む者は、其單に戀歌であるのみならず、實に雲霧崇拜の精神が其半面に輝やいて居ることに氣が付くであらう。天照太神の石屋戸閉居事件を読む者は、其單に暗夜を描けるのみならず、實に太陽の光線の薄弱なる『冬』を徵象したる者なることを感せねばなるまい。

天津諸神が移住の目的地、約束の地と定めたる豊葦原の中ツ國或は水穗國は其決して日本の如き山岳小島國に非ざると、是れ古事記を一讀する者の直感せざるを得ざる處であらう。若し夫れ古事記神話中に吾等の屢々遭遇する處の鰐魚の傳説に至つては、其日本の事に非ざることを知るべく敢て直感の鋭敏を要せず、考證の該博

を待たない。是れ私が、古事記神話の發生地として眼を西方亞細亞メソポタミヤ地方に注いだ所以である。

私は本書第一章に於て、カルデヤ文明の東方に移住したことを略序する。古事記神話の記事が多く其源をメソポタミヤ及び其周圍に發したと考へる私の研究の順序としては、先づ此文明東漸の大體を説くことが必要である。次に私は其カルデヤ文明やヒツチト文明が直接或は間接に日本に移殖されたと思はれる諸點に就て略記した。それは即ち第二章『バビロン及びヒツチトと日本文明』である。

第三章の『太古西部亞細亞の形勢』は、第四章の豫備的説明とも言ふべきで、即ち太古バビロニヤ周圍諸地方に於ける人種分布の形勢を管見したものである。

第四章に於て、私は、『古事記神話の地理』に就て略序する。古事記に記されたる諸地名は之を今日の日本の地理に當てはめると、随分不可解の點が多い。私の本章に記する處も、元より之を正確にして覆へし得ぬものとは言へない。アの古事記神

話の記事は、少くとも幾千年かの際の記憶が無造作に一纏めにされてあるのである。うから、之を今日より明白に現在の地理に充當し得ないことは勿論である。

第五章『海原の國』及び第六章『高志の國』は本來右第四章に入るべきであるのを、少しく長大な説明となりたるを以て、別に章を分けたまでである。讀者恐らくは此第五章によつて、『海原』が單に海のかなたの國だとか、新羅だとか言ふ様な曖昧なもので無いことを明白に知ることが出来るであろう。又第六章に依て、高志が決して日本の『越』で無いことも略ぼ合點が行くであろう。

第七章から第十二章に至る六章は即ち我が古事記神話の中心となれる諸事實、諸傳説及び天孫、出雲、兩民族其もの、直接研究である。従て本書の中心的説明であるとも言へる。我が天孫民族を以て彼のヘテ或はヘト或はヒツチトと稱せらるゝ古代の一人種であること見做し、出雲民族を以て彼のバクトリヤンなりと主張せる邊りは、アカデミックな學者の眼には頗る突飛に見へるであらう。併し新説は何時でも突飛

なものである。コウした冒險が無くては何時でも進歩發展の道は開けない。第十三章『大弓(夷)民族』及び第十四章の『バク(獺)民族の東遷』は、即ち日本の民族が或は南方支那沿岸から渡來し、或は中央亞細亞を経て北方より極東にまで移住して來た有様を略述したものである。是は第一章及び第二章の文明の移住の補助的研究とも見ることが出来る。

以上第十四章までの予の研究が、全部誤りであるとするも、第十五章の『石屋戸集會の神話學的研究』及び第十六章の『石屋戸集會の社會學的研究』の二章は、獨立したる特別の價值を有する。著者は考へて居る。我が古事記神話が、單に歴史學上に興味多きドキュメントであるのみならず、神話學上及び社會學上にも極めて面白い研究資料であることは、此二章の記述によりて些か伺はれるであろう。第十七章の『劍と鏡と勾玉』は是れ第十五章の附屬とも見るべきものである。換言すれば、劍と鏡と勾玉とに神話學的解釋を施したものに過ぎない。

第十八章の『ワニの傳説』及び第十九章の『天及び神』は矢張前述諸章の記事と
同じく此等の諸事項に對して全然新たなる研究を施したものである。ワニの傳説も、
『天』の文字や『神』の文字も、古事記中には頗る重要な役目を勤めて居る事實
或は言語なれば、特に私一流の解釋を發表したのである。最後の『ロアジ教授の意
見』は、巴里大學教授、神話學の世界的權威たるロ翁が、私の主張に對して與へら
れたる批評と勸告とを紹介せんが爲の一章である。

ロアジ教授は私に勸告して、之を公行する以前に先づ自ら自説を批評せよ、と言
はれた。私は本書に主張する假定説が既に完璧を成せりとは考えて居ない。私は其
尙ほ甚だ粗笨なることを知つて居る。併し私の様な漂浪者は、何時如何にして何處
の涯で果てるやら分らない。此様な不安の生活を送る私としては、假令斷片的にも
せよ、未成品にもせよ、機會ある毎に之を世に問ふことが、寧ろ世の中に對して忠
實な仕方であると思ふ。

私は西洋の歴史資料によりて古事記神話の研究を試みた。併し私は考える。是れ
からは我が古事記のドキュメントによりて世界太古史の研究に些か小さな而も新ら
しい光明を投ずることが出来はしないかと。私が我天孫民族と同族なりと信ずる彼
のヒツチト人種の遺文書は、西洋の學者の未だ解釋し得ぬ秘密物である。此世界の
智識から密封せられたる歴史學上の寶庫が、若し吾々日本人の頭腦によりて開かれ
たなら、其れこそ世界の學界に對して一大光明を投ずるもので、日本が數百萬噸の
軍艦を有するよりも其光榮は勝るのである。

若し私に金と時とが有るならば、私は彼の世界文明の發源地、古事記神話の發生
地と信じられる處のメソポタミヤからアラビヤ、バレスチン、シリヤの諸地方、更
に轉じてはベルシヤから中央亞細亞一體を旅行して見たい。そして太古史の遺蹟に
就いて詳しく踏査して見たい。或は今日まで西洋人によつて傳へられたとは異つた
新らしい見方が試みられるかも知れない。勿論今日此等の地方に旅行したとて、

さして珍らしい古蹟が見付かるものとは思はれぬが、單に其土地に接し、其空氣を呼吸し、其風光を見た丈けでも、太古の歴史を直感することが出来る。蓋し其自然其ものは實に生ける學校、生ける圖書館だからである。萬卷の書を読むとも得られない新鮮潑瀾たる記録が此大自然の中には開展して居るのである。生きた歴史は、生きた研究によつて、生きた眼にのみ映するものである。

第一章 文明の移住

第一、海陸の兩路

今より七千年以前に、チグリス及びユフラテス兩河の流域、ナイル河流域、シナイ半島、アラビヤのオトマン半島地方及びバベルマンデブ地方に精花を開きたる世界最古の文明は、今より四千五百年前に、印度洋の沿岸を傳ふて蘭錫に移住し、更にスマトラ海峽を経てジャワに根を下した。又、是と年代を同じうして此文明は波斯高原、中央亞細亞高原に一大勢力を成して進み來り、或はチベットに入り、或はヅンガリヤ及び西ベリヤを経て支那黄河の沿岸に根を下した。

今より三千年の往昔、猶太王ソロモンはフェニシヤ、チルの王ヒラムと協同してオトフィルの遠征を企てた。其オトフィルは紅海を出でて東方に在りと言ひ傳へられて居るのを見ると、多分其れは印度セイロン島の邊であらう、と史家は言ふ。當

時フェニシヤ人の航海術は既に非常なる進歩を遂げ、西はジブラルター海峡を過つて北方英國に通商し、東はスマトラ海峡を突破して遠くボルネオに貿易を開き、地方に其代理店を設置したる形跡までもある云ふ。

第二、交通の頻繁

東部亞細亞と地中海との交通は、既に盛んに開けた。埃及トレミー王朝に當り、世界の最高學府たりしアレキサンドリアの學堂には、既に印度の佛僧が招聘せられて此處に佛陀の福音を傳へた。又、當時、支那は既に絹の國として埃及人に知られしのみならず、支那絹は當時の埃及人に頗る珍重せられ、從て重要な貿易品となつて居た。唯だ其絹の素質は頗る佳良なれども其染色術は未だ埃及人の精巧なるに及ばずと評判せられた。羅馬のシザーが佛蘭西に出征する前、佛教は既に同國西南方ランゲドックに傳へられたらしい。其れは同ランゲドック地方に於て發掘せら

れたる佛像によりて證明せられることとなつた。

東西兩洋の交通は既に斯の如く開かれた。ジャワに於ては、既に久しき以前よりカルデヤ文明を吸収し、更に印度の文明を合せ入れて、今より三千年前に盛大なる特殊文明を開した。而して其文明は、或はボルネオ、フィリッピン、臺灣、琉球等の諸島を傳ふて、或は支那沿岸を傳ふて、日本の九州南部及び西部に到達した。又、バクトリヤン（即ち貂種族）の移住によりて支那の黃河流域に開花したる文明は、或は朝鮮を經、或は海を渡りて日本に上陸した。（*Teiren de la Couperie* 及び *Reclus* 氏 *L'Homme et la terre*. 參照）而して此文明移住の運動は、少くとも今より二千五百年以前に始まつて居たと信ずることが出来る。支那及び朝鮮との交通の事實が、歴史の上に現はるゝまでには、既に隠れたる準備的往復の爲に多くの年月が費やされたに相違ない。

第三、天孫民族の文明

かく文明移住の跡を尋ねると、其旅路は極めて遼遠、其費やされし時間は極めて長久である。カルデヤ或はアラビヤの地を發して、或は印度及び太平洋諸島を過し、或は西ベリヤ、蒙古及び支那を通過する間には、其初發の文明は道々に變化し或は又た紛亂した。殊に佛教が渡來し、支那文學が傳來せる以前に於て、日本に根を下したる文明は、其本源が假令カルデヤ或はアラビヤより流出したりとするも、日本に達する道中に於て既に頗る其色調を失つて居たであらう。併し、彼の天孫民族が日本に移殖したる文明が、其本源の色調と精練とを失つて居たにもせよ、兎に角、當時、日本に土着せる民族の文明に比すれば、頗る進歩して居たに相違無い。社會組織の如きも、古事記神話に現はれたるものは決して原始時代の其れでは無い。天孫民族も出雲民族も、其既に頗る開化せる社會に生活して居たのである。外來の

天孫民族が日本を統一するに至つた最大の理由は即ち此にあると思ふ。

第四、兩民族の旅路

文明の移住は必ずしも民族の移住を意味しない。勿論、多くの場合に於て、民族の移住と共に文明の傳播せらるゝが常態なれども、文明の移殖は民族の移住を待たずして行はれる。私は古事記に現はれたる天孫民族は彼のユウフテス河の上流、カバドシヤ高地に巖穴生活を營みたるヒツチト人種であると信ずるものであるが、併し此民族が日本に到達するまでには、多くの他の人種、即ちセミチック人種、マレイ人種、ポリネシヤ人等の血を混入して來たらうと思ふ。そして其久しい遠い且つ不安定の旅行の間には、往昔の文明も生活も随分忘れられ、變せられ、そして新たなる文明と習慣とを吸収して來たらうと思ふ。バクトリヤ人は支那に移住して其最初の文明を開いたが、彼等は其以前に於て既に日本に移住したと西洋の學者は言

ふ。其移住者は即ち古事記に現はれたる出雲民族ではあるまいか。支那の古書に見ゆる貊或は獏は即ち此バクトリヤン（單にバクとも稱す）種族のことではないか。漢代に當りては、支那北方、西伯利亞、及び韓國にまでその姿を現はしたれば、此一族が更に海を渡りて我が山陰地方に上陸せることは想像が出来る。

私は此に日本民族の人種的研究を試みやうとするのでは無い。唯だ古事記神話の研究に入るに先ちて、其準備的觀念を用意する爲に特に必要なる説明を付するに過ぎない。日本の歴史開闢期に際して、本島大半の地を占領して居た民族はアイヌだと稱せられる。そして其アイヌが白人種である事は疑はれぬと言ふ學者もある。ソは兎も角も、此アイヌ人が其皮膚の色、顔面相貌、及び臭氣に於て露西亞のムジクに酷似するとは多くの學者の一致する處である。果して然らば、日本のアイヌは天孫民族が日本に来る久しい以前に於て、既に何れの地點かを経て西ベリヤと交通して居た様にも思はれる。されば此アイヌ民族は、或は歴史以前に於て既に出雲民族と

交通して居たかも知れない。

第五、古事記編纂時代

吾が古事記の編纂せられた時代は、其古事記に書かれたる傳説神話の時代とは非常に多くの年代を隔て、居ると思ふ。神武天皇即位の時からも、既に千三百七十餘年を隔て、居るのを見れば（本年を紀元二千五百八十四年と假定して）神代記の時代は更に多くの年代を數へねばならぬ。從て此多くの世紀を重ねる間には、其種々なる地方と、其種々なる時代とが、種々に混入して傳へられたに相違無い。其れは古事記の神代記を一讀すれば、直ちに發見し得る事實である。勿論支那文字（古事記に採用せられた文字）が傳來する以前に於て、吾が特別の文字を天孫民族は有したであらうが、併し其れは尙ほ極めて幼稚なる發達状態に在つたであらう。從て之に依て傳へられたる歴史が甚だ蕪雜粗笨なりしことは勿論之を想像し得る。

古事記の書かれたる時代には、支那文明と佛教とが盛んに輸入せられて居た。今日の日本人が何も彼も西洋に學び、洋行者と云へば新智識、學者と考へ、西洋人と云へば偉いと考へる如く、當時の日本人も亦、支那、朝鮮から頻りに其文物を輸入して居た。そして今日の日本人が或は英文を綴り或は日本語を羅馬字で書くことを奨励する様に、當時の日本人も競うて支那文を書き、或は支那字を用ゐて日本語を書いた。古事記の如きも實に支那字を以て日本語を書き現はしたるもの、一例である。此様な時代であれば、古事記の中に、或は支那や印度の思想、傳説が混入して居るかも知れない。併し其支那や印度の思想や傳説といふのも、本源をただせば、其多くはカルデヤから流を發して居るのである。かう考へて見ると、日本文明の起源を研究するには矢張り眼をカルデヤ文明にまで注がねばならぬ。従て古事記神話の研究も、亦唯だ此理由よりするもカルデヤの太古史及び傳説より研究の歩を進めねばならぬ。但し私がカルデヤやヘブリユウの古史傳説に意を注ぐに至つたのは、

元より他の理由からであつた。

天地所_二以能長且久_一者以其不_二自生_一
數能長生

第二章 バビロン及びヒツチトと日本文明

第一、緒言

以下數章に序述する處によりて、讀者は我古事記の神話と、太古バビロンの神話とが頗る近似して居ることの明證を得るであらう。更に又、バビロンの神話から多くの材料を取つたと稱せられるヘブリユウ神話中にも、古事記神話と符節を合すほど一致する點の多きことを了解するであらう。そして私は此バビロンの神話やヘブリユウの神話を日本に傳へたものは恐らくヒツチト民族であらう、ヒツチト民族は即ち我が天孫民族であらう、と信する者である。併しヒツチト民族のことに就ては別に第十一章に於て大體の説明を試みる積りなれば、茲には唯だ其豫備として簡単な記事を留めて置く。そして本章に於ては、専らバビロン及びヒツチトの文明の日

本に傳へられた諸點に就いて略序して置きたいと思ふ。

第二、ヒツチト民族

又私は讀者がヒツチト人種の歴史に就いては大體御承知のことと思ふが故に、此には唯叙述の順序として同民族の歴史上の地位に就いて少しばかり説明して置く。

ヒツチト民族といふのは、今より三千五百年前に、ユウフラテスの谿流、カバドシヤ高原、及びシリヤの地を占領して、東方バビロンの文明を採り、南方埃及の大帝國に對抗し、西方希臘人と接觸して之にバビロン文明を傳へる役目を勤めた民族である。ヒツチト民族はカルデア文明を攝取したけれども、能くそれを消化して自己獨特の文明を建設した。ヒツチト民族はトロイの戦争にも加はつて居る、

舊約聖書に『主エホバ、エルサレムに斯く言ひたまふ、汝の起原、汝の誕生はカナンの地なり。汝の父はアモリ人、汝の母はヘテ(ヒツチト)なり』(以西結書第一六章三

節)とあれば、ヒツチト民族はエルサレム神殿の建設者であつたのだ。舊約聖書の記事を精讀すれば、ヒツチトの事實は諸方に散見する。彼等はアブラハムの時はバレスチン殊にヘブロン地方に住居して之を支配して居る。(創世紀十章一五、一六)エソウは其二人の妻をヒツチトから娶り(同二六章三四)出埃及、約書亞、士師の時代にはカナンカナンの地を占領したる準信徒中に數へられ(出埃及記三章八、一七、同二三章五同二三章二三同二三章二、同三四章二、申命記七章一、同二〇章一七、約書亞記三章一〇、同九章一、同二一章三、同二四章一一、士師記三章五)ダビデ王は其友人中にも(指母耳前二六章六)其僕の中にも(同後書二一章三、同二三章三九)ヒツチトを有し、ソロモンの宮妃中にも數人のヒツチトがあつた(列王上一一章一)然るにソロモンはヒツチトの子孫をアモリ其他の民族と同様に奴隸にして了つた。(列王上九章二〇)

以上は主として南方のヒツチトであるが、北方のヒツチトは當時強勢で、ソロモンと對立して通商し、(列王上一〇章二八、二九歷代上一章一六、一七)そしてヒツチトが来る

といふ風聞だけでダマの強力な王様も遁走して了つた、といふ程に恐れられて居た。

(列王下七章六)

此外、ヒツチトに關するドキュメントは埃及やアツシリヤの記録に發見されてあり、又ヒツチト自身の遺した種々な物件がある。ケレどもそれを列擧することは今の研究の主旨から遠ざかる故に、茲に之を省略する。そして直ちに本書本來の研究に進む。

私が先般本書を著した時は、マダ僅かに研究の方針を立てたばかりのことで、從て同書には唯だ其方針だけを示したに過ぎない。それから今日までも心ばかりは、ハヤつても、研究は餘り進んで居ない。併し其れでも其後に氣の付いたことが可なり多くなつたので増補の數章を書く氣にもなつたのである。

私は第十一章中にも記す通り、天孫民族がヒツチトであるといふ證據として、天忍穗耳命が『マサカチワレカチカチ正勝吾勝勝速日』の名を自ら冠り『吾れカチカチ』と名乗つたのは、其

『カチ、カチ』民族即ちヒツチトたる所以であること。(第一)ヒツチトの岩屋生活は、天孫民族の天の岩屋戸に酷似すること。(第二)高天原は嶽間の原で、ユウノラステの上流ハランの地でヒツチトが勇を揮つた處であること。(第三)天孫民族の八咫鳥はヒツチトの遺像兩頭鷲に似て居ること。(第四)天孫民族が其希望の地たる葦原の中國に達し得ずして、却て築紫の高千穂に降下したといふ歴史は、ヒツチトがメソポタミヤに行かないで、南下してバレスチンを占領した事蹟に符合するが、日本の地理的形勢には應合しないこと。(第五)古事記が諸神を呼ぶに『柱』の語を以てするのはヒツチト人が『柱』形を以て國王を表徴するのと同意義を爲すこと。(六)天孫民族の道案内をした猿田彦命はカルデヤ人なること。彦はバレスチンの遊牧王或は首長の稱號たる『ヒク』といふ文字から出たこと、等を數へたいと思ふ。

第三、寶鏡と太陽圓盤

ヒツチトに關する幾冊かの書を読むで見ると、古事記の記事と參照して極めて興味ある事實が少くない。

ヒツチト研究の専門學者として知られたセイヌ博士の説によると、ヒツチト民族の宗教的禮拜の最高對像は太陽盤ソラー・ディスクであつたと云ふ。埃及王アメンフヒス三世は、自分の助力者としてヒツチト王と結婚的同盟を呼ぶの必要を感じた。然るに『其結婚は埃及の爲にはおかしな結果を齎らした。新皇后は自分と共に常に其名稱や習慣を持參したばかりで無く、自分の信仰まで持つて來た。彼女はテーベスのアモンや其他の埃及諸神を禮拜することを拒んで、吾祖父の宗教を固執した。そして其禮拜の最高對像は太陽盤ソラー・ディスクであつた。此種の禮拜が北部シリヤに流行したことはヒツチト自身の諸遺像にも證據たてられる。ユウフラテスのピレヂクから英國博物館に持ち來られた王像の上部にも、羽を付けた太陽圓形が表はれて居る』(Sayce 氏『The Hittites』一八頁)

八咫の鏡が三種の神器の一つであつて、神代より最も貴重な寶物であつたことは誰も知つて居る處である。古事記に、天照太御神が御孫ニ、ニギの命を葦原の中國に遣さうとして『此之鏡は専ら我が御魂として、あが御前を拜くがごと、イツキまつり給へ』と詔り給ふたと書いてある。が、其鏡とヒツチトの太陽圓盤とは起原を同じうすると言へないか。

第四、小亞細亞のクマヌ神社

其上に、ヒツチト民族が漸く發達して來た時の最高神は女神であつた。ヒツチトが未だバビロンやアツシリヤ人と深く交際しなかつた時代には『ステク』といふ男神が有勢であつたが、後には『母神』が有勢になつて來た。カバドシヤはヒツチト民族發祥の地と見做されるが、其カバドシヤの首都クマヌ（或はコマナとも發音する）は即ち其女神『マ』を以て守護神とし、クマヌは又ヒツチト民族の神都とせられた。

（セイス氏 The Hitites 一四頁）日本の熊野神社は愷か須佐之男命を奉祭したものだと思ふが、ヒツチトのクマヌ神社は女神を本尊とするのであつた。そして此ヒツチトの母神『マ』に奉仕する尼僧達をアマゾンと稱した。是れに就いてセイス博士は曰く、『アマゾンとは是迄、女子戰士を以て成立した一國家と想像され、其本據はカバドキヤのテルモードンの岸にあるとせられた。……併し此アマゾンは本來彼の亞細亞の女神の尼僧達に過ぎない。此女神の宗教はヒツチト軍の前進に伴つて弘通したものである。此女神は、數多き武装尼僧や去勢僧によりて奉仕せられたが、其武装尼僧の數はカバドキヤのコマナのみにも六千人を下らなかつた。……カバドキヤより起つて小亞細亞を征服したるアマゾンの『持鎗軍』は、彼の楯と弓とを持つて光榮ある舞踊をするヒツチト尼僧に外ならない。』（セイス氏 The Hitites 七八頁、七九頁）此尼僧は武勇にして能く強弓を引き、其弓術の妨げとなる右方の乳房を切り落した、と傳へらる。此婦人達の髮飾を其の遺像によりて見ると丁度繪にある神功

皇后に髣髴して居る。

第五、ヒツチトの遺物

ヒツチト女神に奉仕する尼僧のアマゾンの舞踊と連想されるのは、天の岩戸會議に於ける天のウズメのダンスである。西洋の學者は天のウズメのダンスを見ると直ちに希臘太古のダンスを思ふと言つて居る。Grunsterberg 氏 *Influences occidentales dans l'Art de l'extreme orient* 一六)希臘でも、羅馬でも古代のダンスは決して悲劇的のものではなくて、喜劇的のものであつた。太古には悲劇の面は無かつた。そして西洋の學者は日本の古代の舞踊に用ゐるマスクは希臘、羅馬の古代の其れと起原を同じうすると言ふて居る。然るにヒツチト民族の遺した種々な像を見ると、其面相が日本の古いマスクにソツクリなのである。

又、日本に古代から傳つた大弓や短劍(双双)や鎗(双双)は、支那に傳はつた

ミセニヤン型とは全然異つて古代希臘の型であるとの事である。又、日本に太古から用へられる鞞(弓弦の反射に備へる爲の)は支那やペルシャにては知られない武器であるが、ニニヅやバビロンの浮彫像中に能く之を發見するといふ。(同前書一五頁)右の大弓はヒツチトの最も得意とした武器である。尼僧までが之を携へてダンスしたのである。之を希臘に傳へたのもヒツチトであらう。鞞や他の武器を發達せしめたのもヒツチトであらう。そして其ヒツチトが海路を傳はつて日本に持つて來たのであらう。日本に見出す總ゆる古形の劍や鎗は、悉く其模型をヒツチトの武器中に發見し得るのである。(第十三章「大弓(夷)民族」參照)

カルデヤから起りてヒツチトのカバドキヤ地方、シリヤ地方に弘通した女性崇拜はパレスチンに入りてゼルサレムの神殿内にも行はれた。聖書中にあるアシラ像は即ち其れである。(列王記十三章二一―二三)そして日本の古事記にて諸神を數へるに「柱」の語を以てするのは、元來この「アシラ」から由來したのだと言ふ説もある。アシ

ラ像は女性器を徴象したものである。

第六、風俗の近似

ヒツチトとヤマト民族とは、其容貌や風俗に於ても似寄つた處が尠くない。例へば男子の或者は膝までの襦袢を着て帯を付け、又或者は長衣を纏ひ、常に帯を以て前を合せて居る。そして歩行中の姿勢をした像は其帯以下の前を開らいて居る。其袖は大して廣くも長くもない。女子は長衣を着け、矢張り帯をしめて居る。而して袖は男子のと異つて頗る長い。其帯から下はヒダが取つてある様に見える。日本人の袴に似て居る。又婦人の像には打かけの様なものを着て、全身を隠したのもある。男子の像には今のトルコ帽を大きくした様なものを被つたのや、ツバの無いハンチング帽の様なものを被つたのがある。是れは日本古代の風俗中には見當らない。頭髮を後に下げて、細い八巻を着けた像は、神功皇后の繪を見る様な心地がする。又ヒ



ヒツチトの文字と婦人の像

ツチト民族の群は、多く爪先上りの長靴を穿いて居る。其爲にヒツチト民族は寒い山の奥から出て来た人種だらうと言はれる。シリヤ邊にては其様な品物は餘り必要でなく従て發明される場合が無い譯である。日本の古代の人物繪なども、服装は熱帶的でありながら、其服装に似合はない長靴を着けて居る。是れは矢張り天孫民族が熱帶地方を通過して来たに係はらず、其古來の習慣を棄て得ないで長靴を穿いて来たことを意味するのであらう。(此一節に就ては Lantshere 氏の「De la race et de

Jalangué des Hititicos」二三頁から三三頁を参照)

コオカサス山麓のヨルジャ國はバビロン文明を直接に繼承して今日に及んだ世界唯一の國だと稱せられる。其國語の如きも全然其四隣諸邦と異なつて居る。そして同國の歴史家は其人種はヒツチトの後裔だと稱して居る。私は滯歐中に數人のヨルジャ人男女と交際したが、其容貌は歐羅巴人よりは寧ろ吾々日本人に近似して居る。髪も眉も黒く、瞳も黒い。皮膚の色なども白哲人種とは異つた處がある。勿論諸民族が幾度も移動して居れば、赤毛の人も緑眼の人も時には見當るであらうが、多くは右の如くである。

第七、穂々手見命とイサク

私は後章に於ても序述する積りであるが、大國主神の事蹟とアブラハムの事蹟とに驚くほど細事に渡つて符合點の存することと、其アブラハムはカルデア傳説の偉人オルクハムから由來して居ると信ずる者である。然るに舊約聖書の創世記を讀む

と、アブラハムの子イサク及びイサクの子エサウ及びヤコブの事蹟と日子穂々手見命及び火照命の事蹟とに近似點の多いことを發見する。此事を茲に記するのは第九章と重複するけれども、文明移住に關係することなれば、特に省略して序して置く。

私は先づ古事記の記事の一節を茲に紹介する。古事記にては火照命と火遠理命(即ち日子穂々手見命)との間に山サチ海サチの事に就いて争を生じ、弟の火遠理命が海邊にて泣いて居ると、鹽椎の神といふのが來て、無間勝間の小船を造つて其船に乗せてそれを押し流すに當り教へて曰ふた。『すなはち其道に乗りて往ませば、魚鱗の如と造れる宮、其綿津見神の宮なり。其神の御門に到りましなば、傍の井の上に袖香へあらん。其木の上に坐ませば、其の海の神の御女見て相議ん者ぞと教へまつらき。カレ教へしにまにまに少し行けるに、つぶさに其言の如くなり……、こゝに海神の女、豊玉姫の從婢、玉器を持って水をくまんとする時に、井に光あり、仰きて見

れば、麗はして壯夫あり、いとあやしと思ひき。コ、ニ火遠理命、其婢を見給ひて、水を得しめよと乞ひ給ふ。婢すなはち水を酌て玉器に入れたてまつりき。……豊玉姫命あやしと思して、出見て、すなはち見めて目合して、其父に、吾門に麗しき人いますと白し給ひき』かくて海神は此命を迎へ入れて大いにもてなし、吾が女を之に婚せた。

私は次に舊約聖書の記事を紹介する。右の記事にては、穂々手見命は其兄と争ひの結果、ワダツミの國に往き、井の傍にて豊玉姫と戀に落ちたのであるが、イサクの場合はモ少一事情が複雑になり、宗教的になり、偽善的になり、そして兄弟喧嘩はイサクの子のエサウとヤコブとの間に起つて居る。唯だ兩方とも井が結婚の媒介になつて居る點が頗る面白い。又、井が媒介になつて花嫁が見付かるのであるが、聖書の方では新郎の僕が本人に代り、古事記の方では花嫁の婢が本人に代つて居る。聖書の記事は餘りに贅長であり、又後章に紹介しあれば、茲にはその一小部分だけを摘録する。

を摘録する。

『斯くて僕、……メソポタミヤに行き、ナホルの邑に至り、其駱駝を邑の外にて井の傍に跪伏しめたり。其時は黄昏にて婦女等の水汲にいつる時なりき。……リベカ瓶を肩にのせて出できたる。彼はアブラハムの兄弟ナホルの妻ミルカの子ベトエルに生れたる者なり。其童女は觀るに甚だ美しく且つ處女にして未だ人に適きしことあらず。彼井に下り、其瓶に水を盈て上りしかば、僕は行きて之にあひ、請ふ我をして汝の瓶より少許の水を飲ましめよといひけるに、彼、主よ飲みたまへといひて乃ち急ぎ其瓶を手におろして之のましめたり、……汝は誰の女なるや、請ふ我に告げよ、汝の父の家に我等が宿る隙地ありや、女彼に曰けるは、我はミルカがナホルに生みたる子ベトエルの女なり。……家には藁も飼草も多くあり且宿る隙地もあり。』

(創世記二四章九—二五)

アブラハムの僕は迎へられてナホルの家に入り、アブラハムの意を傳へ、女リベ

カをイサクの嫁にくれと申込んだ。リベカの親と兄とは之を諾した。そして「イサクはリベカを其母サラの天幕につれ至り、リベカを娶りて其妻となして之を愛したり。」(創世記二四章五九―六七)

第八、井と玉壺と高田下田

アブラハムの子イサクの場合も天照大御神の曾孫穗々手耳命の場合も井が重要な印象を残して居る。何故に井が此程の印象を與へたのであらう？ 此れは井が此人々の生活に重要な材料であつたからであらう。モウ一步進めて言へば、水が非常に貴重であつたことを思はしめる。従て此二ツの出来事が熱帯地方或は砂漠近傍に起つたものであることは想像が出来る。聖書の方はメソポタミヤの出来事としてあるが、古事記の方は其地名を明知することが出来ない。唯だ兩方の傳説が其起原を同じうするものとすれば、矢張り西方メソポタミヤ邊の傳説を古事記が採録したもの

と言ひ得るであらう。

次に水をくむ道具の玉器は書紀に書かれた玉壺の方が分り易い。書紀には又玉瓶の文字を並用して居て、學者中に此瓶をツルベと讀ます人もあるが、其れは適當で無いと思ふ。矢張り聖書の讀方と同様にカメと讀む方が適當であると思ふ。何となれば、此事件が假令日本の出来事とした處で、此時にはマダ釣瓶は無かつたであらう、處が阿弗利加や阿刺比亞等の地方に行くと、夕刻に婦人達が大きな壺を肩或は頭上に捧げて泉或は貯水所に水汲むのを例とする。そして其れが毎日の重要な仕事で従て人々に深い印象を與へたものと思ふ。熱帯地方に旅行したものは、此古事記の記事を讀んで特に其ピトレスクな詩的な光景を想起することが出来ると思ふ。

又「傍の井の上に湯津香木あらん」といふ古事記の文字も熱帯地を想像させる。柚香木は柚或はオレンジの如き香薰芳烈な熱帯植物であらう。最も此出来事は日本の九州で起つたとすれば、同地方に此種の樹木の存在を否定することは出来ない。



バビロンのハムラビ時代の耕作

唯だ柚香木が井の上にあらんとの記事は如何にもそれが熱帯旱魃の地を思はしめる。何となれば元來普通の暑氣位には何の傷害をも感じない此種の植物を特に井の傍に出見すからである。

次に又、綿津見大神が火遠理命に誨へた『其兄高田を作らば汝命は下田を營り給へ、其兄下田を作らば汝命は高田を營り給へ』の語はアラビヤのヒミヤリト文明を想ひ起さしめる。蓋し高田と下田とを並存するのは山岳水田の耕作を意味し、二千數百年前の日本には之を想像し得ない。之れが軍略の條件となるほごであれば可なり廣大なものと想像せねばならぬ。然るに世界最古の山岳水田

耕作地たるアラビヤ南方ヒミヤリト地方に於ては今より少くとも四五千年前に既に此耕作が開けて居たのである。是れはバビロンの耕作法を學んだもので、其耕作法を更に埃及に傳へたのも此ヒミヤリト人だと歴史家は言ふ。

私は第四章に於て、火遠理命の父君ニギの命が高千穂（私は之をシナイ山だと信ずる）を立ちて、『カササの御前に眞素通りて……此地は朝日のたゞさす國、夕日の日照る國なり』と言ふたといふ、其カササの崎は其ヒミヤリトの突角であると言いたが、今日此高田下田の戦略を讀みて前説を更に確めることが出来るのである。

第九、縣主と國造ミヤマト

私はヒツチト民族とカルデヤの原始民族たるアツカド人とは、同族であらうと信ずるものである。又アツカド人が其同時代のスメル人と相對して居るのは、古事記に天津神と國津神と相對立して居た事實に符合し、アツカドとは山岳人を意味し、

スメルとは平野人であるとの説に重要な意味がある、と信ずる者である。私は第四章及び第十二章にも説いた様に、スメル人が其水穂の國を言ひ表はす『ケンジ』といふ語はケニ或はクニと變じて日本語の『國』の語原をなしたと信じ、日本語のヤマトは山人であつてアツカドを意味すると信ずる。然るに其後英國のアシツリヤ學の泰斗キング博士の大著『バビロニヤ及 アツシリヤの歴史』には、アツカドとはセミチツク語の發音でアツカド人自らは『アガド』と發音したと説いてある。又其名は最初メソポタミヤ北方の一都會の名稱であつたが、其都會が有力になるに至つて其地方の名稱となつたのである。(同書上卷一四頁)

此アガトとケンジとの對照は私に少なからず興味を興へるのである。何となれば、ケンジは『國』の語原をなし、アガトは『縣』の語原となつたものと信せられるからである。そして此區別によりて始めて『國』と『縣』との區別と其語の由來とが明白になる。從來私は『國造』『縣主』の區別が分らなかつたのであるが、此研究によ

りて始めて、『縣主』とは天孫民族の首長で、『國造』とは『國津神』の首長であつたといふ風に信ずるに至つた。後世になつて一種の官職の様に見做されて來た是等の名稱は、その源を探ぬれば斯くも遠い昔の社會生活に存したのである。

次に記すべきはヤマトの語である。私は先きには、ヤマトは山人といふ意味でアツカド人のことでは無いかと考へた。然るに其後バビロン最古のアツカド語を研究して見ると、此私の想像は蓋し當らずと言へども遠からずであつた。アツカド語に於ては『國』といふ意を表すに、マド或はマトと發音して居る。而して山の形をした形象文字をヤと發音して居る。若し此ヤの音を以て山岳の意味を表示するものとするれば、ヤマトは即ち山國といふ意味になる。ヤマト民族とは山國民族といふ意味となり。山岳人の意味に慣用されたる『アツカド』人を以て我が天孫民族の祖先と見做すことも出来るのである。然るに私はヒツチト民族を以て我天孫民族である、と前に説いたが、其ヒツチトとアツカドとは果して之を同一視することが出来るか。

之に就いては反對説も無いでは無いが、古代歴史の權威ルノルマン氏やコンデー氏等は此兩人種と其言語とが酷似することを主張する。其れにしても此兩民族がツラ
ン人種に屬することは諸學者の一致する處である。

唯此に疑問とすべきは、ヤの音が果して山岳を意味するや否やにある。抑もアツ
シリヤのテキストにては山岳は大抵シヤドといふ發音になつて居る。此アツシリヤ
の言語はバビロンの言語を繼承したものである。唯だ此語が果して上古のアツカ
ド人の用語であつたかどうかは今私には斷言し得ない。

第一〇、三十一文字の由來

西洋の學者は、日本の和歌は希臘から傳はつたものに相違無いと言ふてゐる。

(Munsterberg & Influences occidentales dans L' Art de l'extreme orient p.七五) 其れは、希臘の古代にも三十一シラブルの二枝一幹詩が行はれ、其詩形が日本の征服者にして

天照大神の兄弟たる須佐之男命の創始した『和歌』の形と全然同一だからである。私は須佐之男命はベルシヤ灣の北方にあるシユスの都(アツシリヤ民族の本據)の首長であると信じ、そして其『八雲立つ』の戀歌は同時に雲霓崇拜の意を背景にしてゐると考へる者である。若しギリシヤに其詩形が存在するとせば、其れは西洋學者の言ふと反對に、或はヒツチト人を仲介にしてギリシヤ人が却てスサノヲの後裔から學んだのかも知れない。何となれば、希臘人はヒツチトによりて古代バビロンの文明を學んだものであるから。最も希臘人は彼の『トアソン・ドオル』の傳説の時代から既に小亞細亞の北海岸に住居した形跡もあり、ヒツチト人とは互に軒を並べて生活したらしいから。何方が何方から學んだものか、それは分らない。併し第十章にも説明する通り、希臘よりも先きにバビロンに於て早くから三十一文字五句の短歌が行はれたことは事實である。そして大和民族の方が希臘人よりも先きに此短歌に親しんだことも之を想像することが出来るのである。

西洋の學者は日本の古代の文明はマレー人がバビロンや希臘の文明を承容れて、
聽て其れを日本に傳へたのだと言ふてゐる。否な寧ろ其文明を利用して日本を征服
したのだと言ふてゐる。或はソウかも知れない。其れは私の研究にはドウでも可し
い。唯だ多くの傳説が彼方から傳はつて來たことを明かにするのである。

第一一、ワニの意義

穗々手耳命がワダツミの神の許を辭して故國に歸る時に、之を護送したる「一尋
ワニ」の事が古事記にある。又、書記には「海神所乘駿馬、八尋鰐魚也。……惟我
王駿馬一尋鰐魚、是當一日之内必奉致焉」とある。久米博士は、此「八尋鰐魚は軍艦
に喩へたること文面に明白なり。……一尋鰐魚は海神宮の汀に繋げる小形の乗船なり」
と言ふてゐる。此所説は極めて適當な解釋だと私は思ふ。

唯だ此に残る問題は、日本に棲息しない「ワニ」の名稱が、何故に日本の軍艦に付

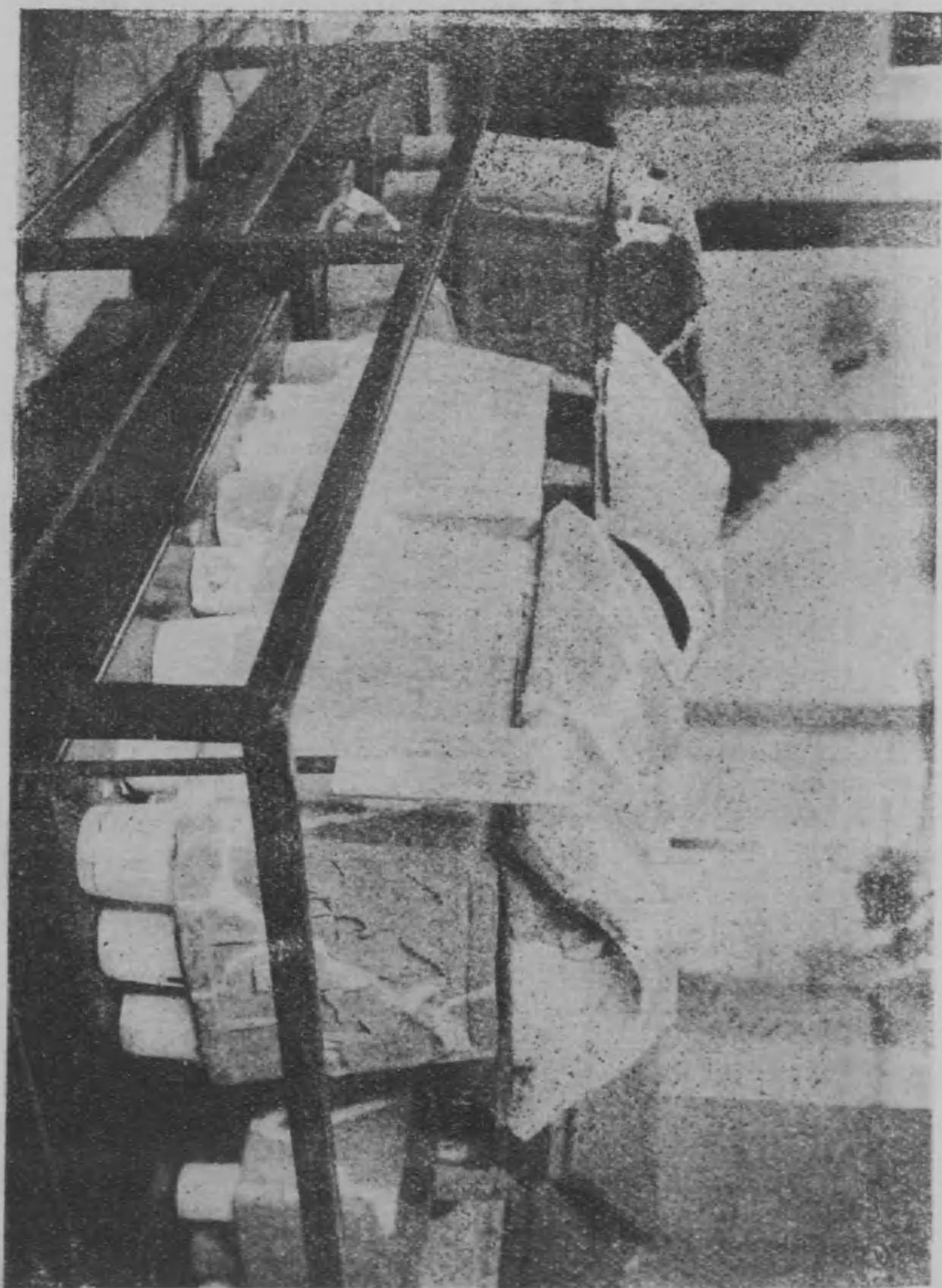
せられたか？ 又彼のクロコダイルに附した名稱はエジプトにても南洋にても「ワ
ニ」とは稱はないが然らば此名稱は何處から來たか？ といふ點にあつても、私は此問
題に就いては、第十八章に詳説して置いたから茲には之を省略する。唯だ此「ワニ」
の名稱は、太古カルデヤ人と其文明とを守護したと傳へられる「オワネス」から由
來したものであることを言明して置く。オワネスは或時は救助船、或時は商船の守
護神となりてカルデヤの最も貴い神魚であつた。聖書のノアの傳説の模型であると
稱せられるシトナビシテムに方舟の建造を教へ、大洪水に際して之を救つた、エア神
は即ち此ウワネスの別名である。又別にニギ・アザクと稱せられるが、其ニギ・
アザクとは「學問の主」といふ意味だといふ。又此ウワネスは希臘人の發音法でエ
ア或はエアバニの訛傳だといふ。エアバニは日本に來てワニと訛傳されたのであろ
う。

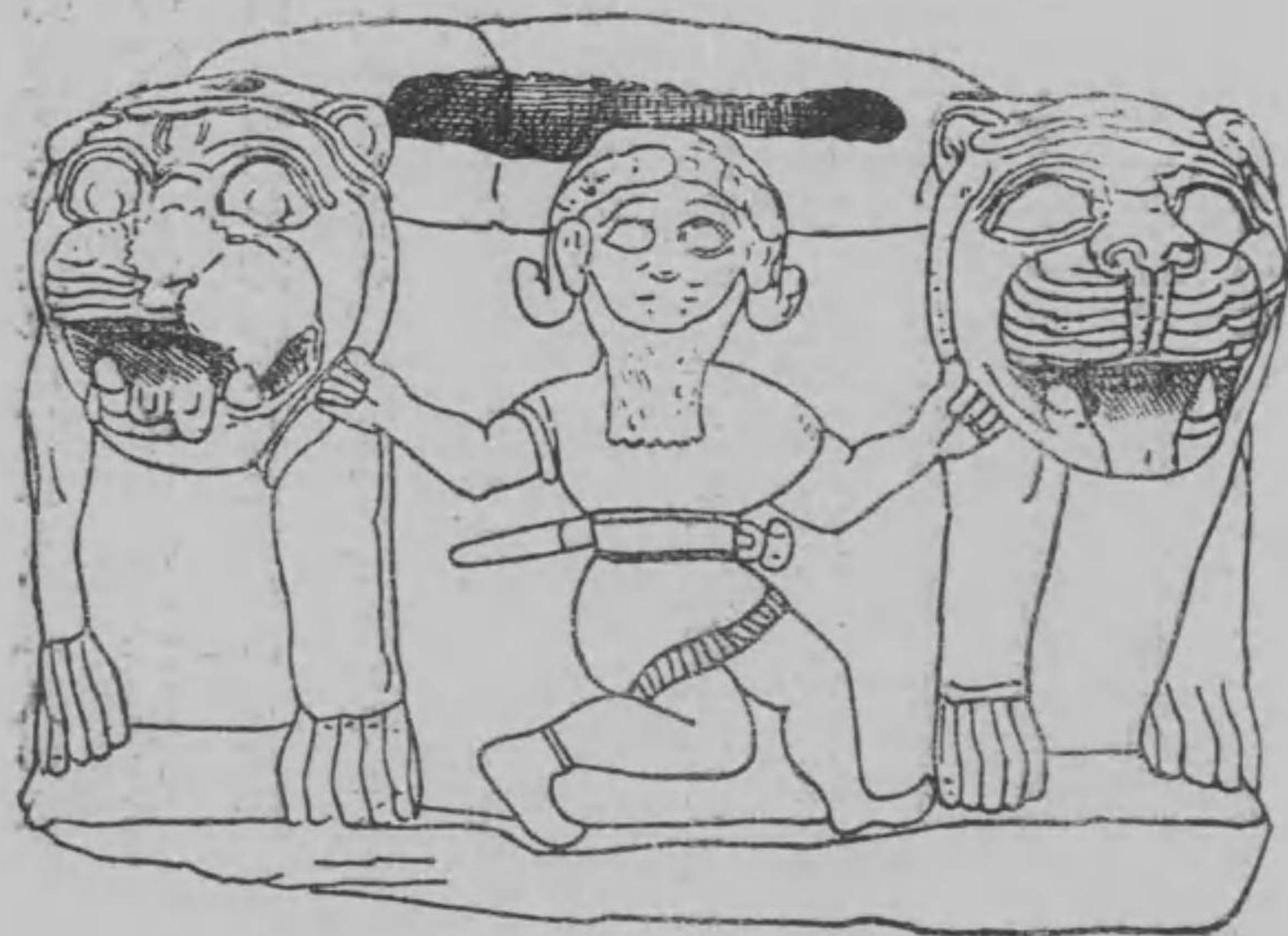
第一一六 陶棺及び大黒天

上野の帝室博物館に行くに、美作の國から發掘したといふ陶棺がある。久米邦武氏は之に説明を加へて、『屋根形陶棺は泰西の古史に關係多き小亞細亞地方にて發掘せらるゝ三千年前のものなるに、遠く我日本に之を見るは奇なりと謂ふべし。思ふに彼地方より轉徙し來りたる民族が、其古俗に基きて、其君長の埋葬に此陶棺を用ひしものなるべし』と言ふて居る。三千年前に小亞細亞を占領して居た民族は即ちヒツチトであるから、單に此一證據物によるも、ヒツチトが我國の祖先の一部分を成せることは明白であらう。私は昨年歸國に際してシリヤのベイルウト港に寄港したが、博物館のと同様な棺の發掘されたのを見た。又博物館の棺の浮彫は全然ヒツチトのものである。

次の頁に示した陶棺はシリヤのベイルウト博物館のものである。之を上野博物館

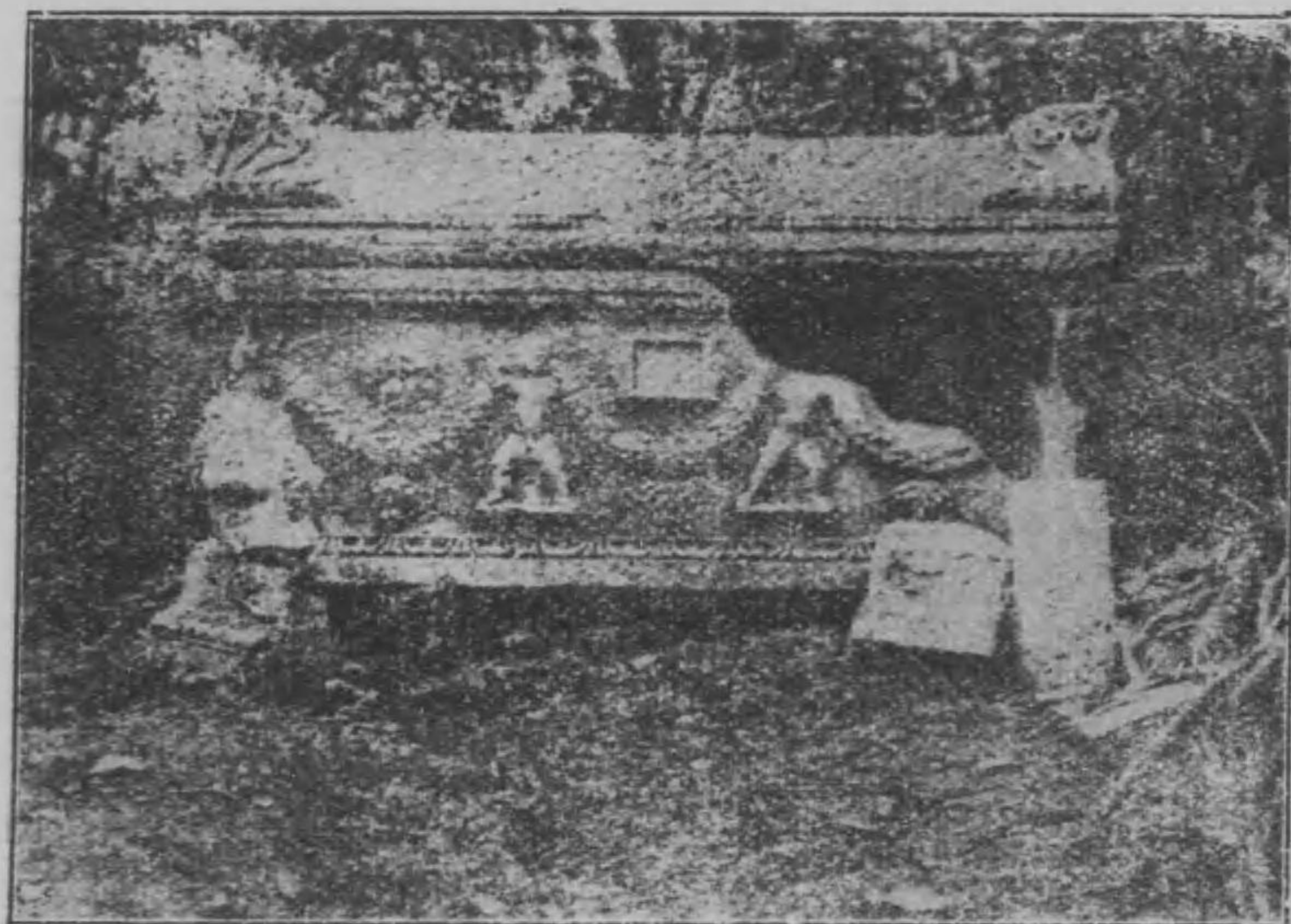
美作國から發掘したる陶棺





上 ロツチトの彫像

下 バビロンの彫像



棉陶のトウノイベ

の品に此すると同じ屋根でも其輪廓線に
 大なる相違がある。日本のは屋根形が曲
 線を以て出来、シリヤのは其れが直線で
 出来て居る。尤も上野博物館には之と並
 んで殆ど直線を以て屋根を造つたのがあ
 る。又棺身も上野のは底部が少しく擴張
 されて居るがシリヤのは直角に出来て居
 る。併し此直線直角を以て造る様になつ
 たのは、是れは希臘工藝の感化を受けて
 からのことであつて、其れ以前のヒツチ
 トの陶棺は底部が擴張されて居る。
 私は又此にヒツチトとバビロンとの彫

刻を挿入する。是れは何れも、一人の人物が両手にて動物を操つて居る處を表はしたもので、帝室博物館の陶棺の浮彫と其形態を同じくする。帝室博物館の陶棺中には二個の菊形を浮彫にしたのがある。併しこの菊形の花弁は之を精査すると、實は八瓣になつて居る。是れはバビロンやヒツチトの彫刻中に屢々遭遇する畫形である。或は日まわりの花かも知れず、或はバビロンの楔形文字の天即ち*から由來したのかも知れない。

又、上野博物館に行くに、五谷先帝の像といふのがある。是れは『炎帝神農氏を祝るものにして五穀の神(五谷の谷は穀に通ず)として崇信せられ、凶作をさけ、蟲害をふせぐ等、此神に祈求するを常とす』と説明して居る。然るに倫敦の東洋學者テリアン・ド・ラクツブライは神農氏を以てアツシリヤのサルゴンだと説いた。茲に興味のある一事は、此神農氏の像が黒人の色と相貌とをなして居ることである。そして西洋の學者中には、カルデヤ文明は黒人が開拓したのだと主張する人もあつて



大黒天に似た石像

此像を連想せしめるのである。又日本の大黒天は大國主のことであるとの説もあり、或は其大國主の大黒天は此黒人即ち神農氏より轉化したものかも知れない。或は此五谷先帝といふ名稱も、印度ベンジャブ地方から來たものかも知れない。何となれば Pen djearb は五ツの谷河といふ意味であるからである。神武帝の御兄五瀬命の名稱も或は此ベンジャブから由來したものかも知れない。最も三千餘年以前には此地方をセプタシンド(Sapta Sindhu)と稱んだ處を見ると、極の太古には七ツの河が彼の平野を滋ほしたものであろう。然るにアレキサンドル大帝は此「五河」國に滯留したとの事なれば當時は既に五河に成て居たのであらう。カルデヤ文明は東北方に走つて臆て支那に入り、東南に來て印度を開いたが、其兩派は共に日本に傳つて來たのである。

第二二、樂器

古事記神話の中には樂器の記事は見えない。従つて神話研究としては本項は關係の無いものであるが、唯だバビロンやヒツチトの文明の研究としては、些ばかり序述したいことがある。

上野の博物館に行くと、正倉院の箏篋の模造が飾られてある。そして其箏篋はアツシリヤ或はバビロンから傳はつたのだと稱せられる。又、バビロンやヒツチトの遣した浮彫像には、日本三味線と全然同一形の樂器を日本人と同一姿勢で弾いて居るのがある。尤も此三味線は、日本には極めて近世になつて傳へられたもので、其時は彈方も解らなかつた位であれば、昔から日本に傳はつて居たとは思はれない。或は太古の時代に傳はつて居たかも知れないが、其れは日本の文明には何の影響をも與へては居ないのである。唯だ箏篋は今日も尙ほ保存されてある位であるから、聊か此に記述を加へて置く。

是に就き斯界の權威たる田邊尙雄氏の『南倉階上にある箏篋に就て』といふ一章

が上野博物館発行『正倉院の樂器の調査報告』中にあるから、其れを茲に借用して置く、田邊氏は曰く。

『南倉階上にある箏篋は所謂ハープの一種なるが、其の形頗る特種なるものなり、此の樂器が他種のハープと全然異なるものは、次の二點となす。

(一)下部に脚柱あること。

(二)上部の木匡を空洞にして共鳴装置をなせること。

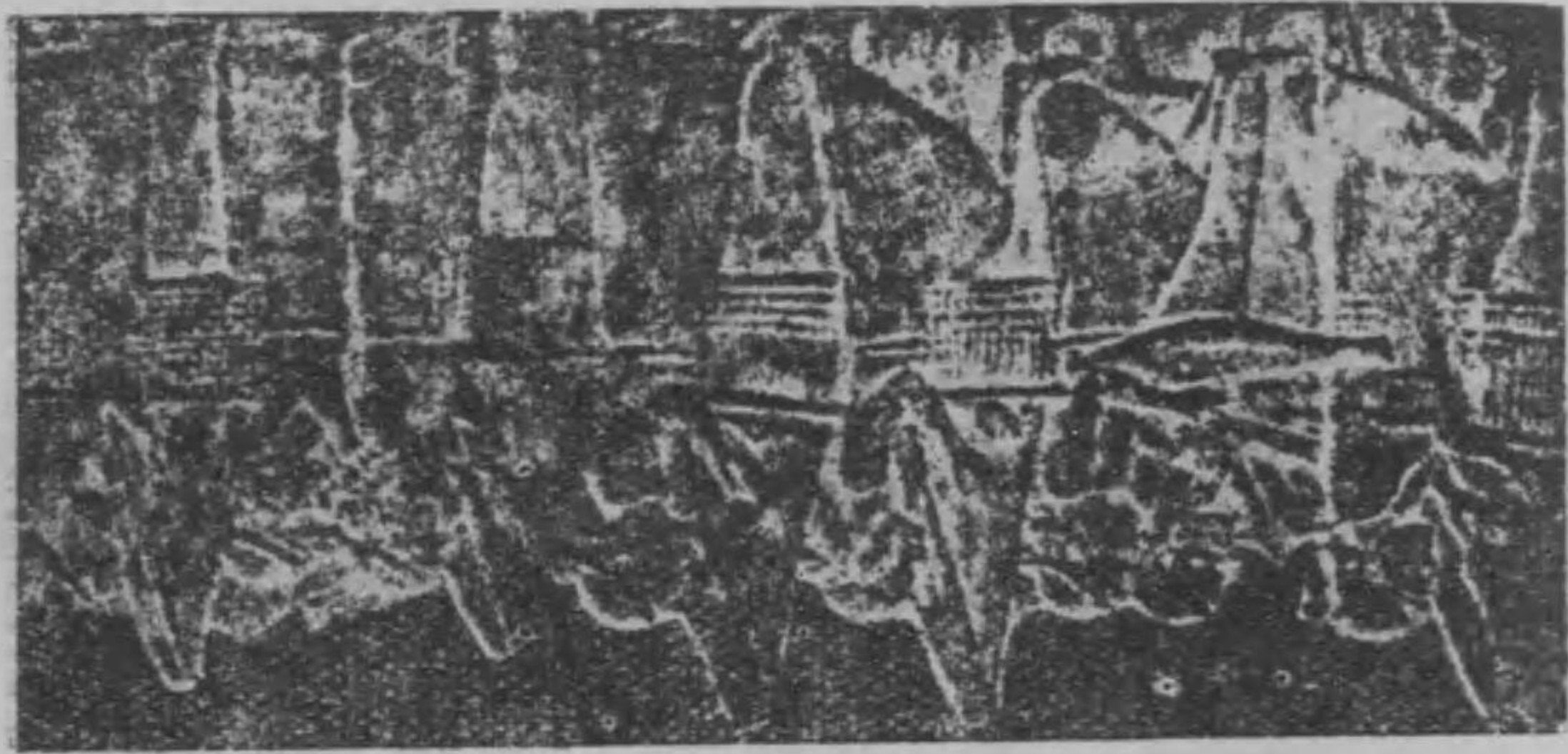
此の二個の特徴を有せるハープを古代樂器中に求むるにアツシリア、バビロンの外に之れあるものなし。

古代エジプト、ユダヤ、ギリシア、ペルシア、インド等のハープは孰れも下部に脚柱を有せず、且つ共鳴装置は必ず下部にあり但し古代ギリシヤの瓶の畫にあるハープは上部に共鳴装置あれども、此れは正倉院のものご其形全く異なり。

有名なる信西入道舞樂圖中にある箏篋はインド系のものなるべく、下部に脚柱な

上野博物館にある模造品箏篋





アッシリア浮彫に描れたハルプ



信西入道舞樂圖

きのみならず、上部の木匡に共鳴胴なきを以て正倉院の箏篋とは全然其の趣を異にせり。

支那に行はれたるハープに箏篋と臥箏篋とあれども、此れ等は全然その形を異にせるのなり。

支那に於て箏篋と名付くるものは、蓋し此の正倉院のものと同形なるべきか、杜氏通典に曰く、

箏篋胡樂也、漢靈帝好之、體曲而長、二十

三絃、豎抱於懷中、用兩手齊奏、俗謂之擊箏篋。

又隋音樂志に曰く、

立箏篋出自西域、非華夏舊器

と、此に西域とあるはアッシリアの樂器が中

央亞細亞を経て、支那に入りしものなるべし。

支那の近世の繪畫に此の樂器を片手に提げて持てるものありと云ふ、又その横軸の一端を椅子に立て掛けて、その脚柱を地板上に立て、之れを奏せる形を見はせるものありと云ふ、此の樂器は古代のものにして、中世以後之れを使用したることを聞かず、故に此等の繪畫は孰れも想像に依りて畫きたるものなるべく、その用法は孰れも誤まれるものなりと信ず、蓋し地板上に置くハープは、その上部に共鳴胴を作るの必要なのみならず、却つて上部に共鳴胴あるときは、不利益の結果を來すべし、實際上部に共鳴胴あるは、アツシリアに於けるが如く、之れを高くかさして奏する爲めと看むより外なし。

尙ほアツシリアの樂器はその浮彫によりて考證すべきものなるが、アツシリアの浮彫は人物動物草花器物等、孰れも大小の割合に於て頗る寫實的なり、乃ち浮彫中のハープの大きさ、人物の大きさ等を比較して、正倉院の箏篋と對照するに、實に其の形及び大きさに於て、驚くべく合一せるを見る。

此の故に予は正倉院の箏篋を以て、アツシリア系のハープ（それが支那又は朝鮮



最古バビロンのハープ

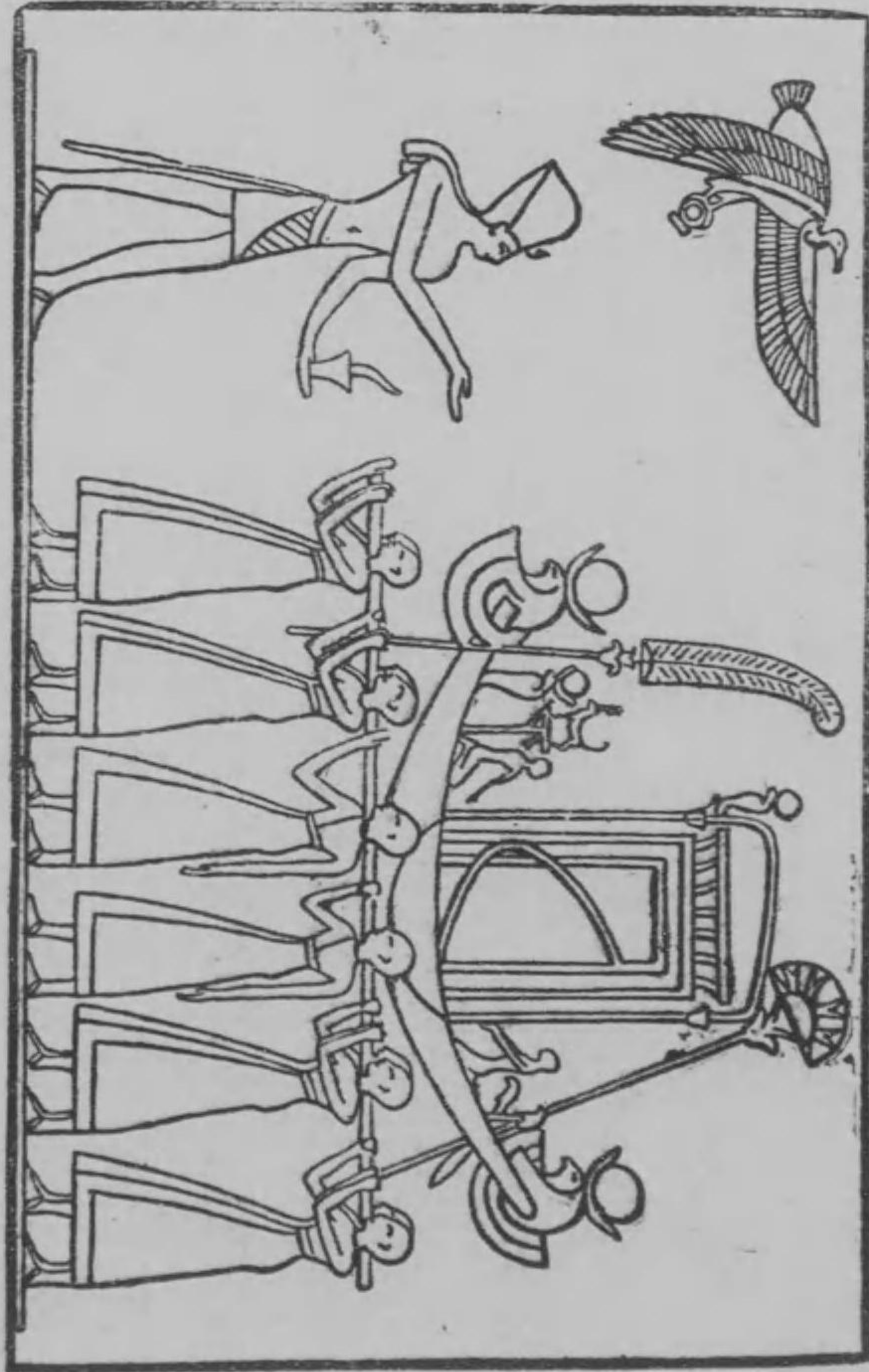
に於て模造せられたるものか）なりと斷定するものなり』

然るに此に掲げたる『最古バビロンのハルプ』はスメル、アツカド時代のもので、極めて原始的の形體を具へて居る。田邊氏の所謂アツシリア系のハルプとは些か其趣を異にし、上部に共鳴胴も見えない、バビロンの遺像中には此圖の如く坐して弾くものと起立して高くかざして奏する圖と兩者を存すれば、恐らくは兩種の樂器が發明されてあつたのであろう。併し其れにしても正倉院の立琴が田邊氏の言へる如きアツシリア系のハルプであることは何人も疑はぬであらう。

最後に田邊氏の説によると、日本の古樂の一たる林邑樂はバクトリヤより印度を経て日本に傳はつたものだといふ。其バクトリヤ文明は即ちバビロン文明を直承したものである。

第一四、神輿の起原

今日日本にある神輿が、何時代から存在するものやら、又それが果して日本で發



圖古の輿神「ユシノコ」るたたら茲に國のトチツヒリよ及埃に爲の除驅疫惡

明されたものか或は外國から傳來したものか、私はそれを悉しく知らない、日本に於ける神輿の起原に就いては、それ其れ専門家の研究が世にも現はれて居るらしいが、それすら拜誦するの機會を得ない。私は唯だ相變はらずヒツチトの歴史に現はれた神輿に就いて一言して置くに過ぎない。それは、ヒツチト帝國の隆盛であつた時分の事、多分カッシル第二世の時代であらう、其王女の一人が癲癘を患つた。而して其れは惡魔に附かれたのだと信せられた。ソコで埃及王ラムゼス二世は我が守護神コンシュをカチの國に送つて王女の平癒を祈らせた、といふことがある (King of Babylon 二二二頁) 其コンシュの神輿は圖に示す如きもので、直ちに日本の神輿の起原では無いかと思はしめるではないか。且つ日本語の『コン』も或は此『コンシュ』から來たでは無いかと疑はしめる。尤もコンシュは月神其ものゝ名で輿の名ではないが、何時の間にか、其れが輿の名になつたのではあるまいか。其様に思はれぬ事もない。惡疫驅除の爲に神輿を擔ぎ出す習慣は日本各地に傳はつて居る。

第一五、佛教の起原

西洋の基督教宣教師が初めて印度に來た時、印度の佛教儀式の多くが基督教儀式に似て居るのに驚き、『佛教徒等は基督教儀式を借用して居るのだ』と叫んだといふ。スルと佛教徒の方では『笑談言つちやイケない、佛教は基督教よりはズツと先きに起つたもので、お前達こそ佛教の眞似をするのだ』と争つたといふ。何れが眞實か分らないが、佛教徒はトレミイ王朝の時には既にアレキサンドリヤに招聘せられて佛陀の福音を傳へ、シーザーよりも以前に佛國ランゲドック地方にまでも入り込んだ形跡さへある。

併し、佛耶兩教の何れが先きで何れが借用した、といふ様な争は、一朝カルデア人の宗敎生活を見れば消散して了ふであらう。西洋の學者は基督教の『エデンの園』はバビロンの『歡樂の園』の傳説から由來したものだと言ふ。

そして私は佛教の極樂淨土だの西方淨土だのといふ思想も矢張り基督教のエデンの園と同様にカルデヤの『歡樂の園』から由來したものだと思ふ。佛教の『地獄』の思

ゲデア時代の像



想も亦カルデヤの傳説から出たといふことは第十四章の黃泉國の説明中に述べる通りである。

尙前頁の寫眞に示す處の古像は、其姿勢や服裝が全然今日の佛僧ソツクリである。是れがカルデヤの太古スメル、アツカド時代の遺像なのであるから頗る興味が深い。尙ほ同時代の浮彫を見ると、宗教儀式の主要な地位を占むる大人物は悉く剃髮して居る。そして其れが禮拜には合掌して居る。前掲立琴の寫眞『最古バビロンのハルプ』中に見る上部の人物などは能く其事實を物語つて居るのである。ヨウした種々な事實を綜合すると、佛教が其思想其儀式の源泉をバビロンから汲み來つたことに氣が着くであろう。私は茲に唯だ眼に着いた點を略序したに過ぎない。専門的の智識を以て詳細に研究すれば尙ほ多くの驚異すべき事實を發見し得るのである。

第一六、更科そば

是れも古事記神話とは關係の遠い事件であるが、更科そばの起原に就いて些かばかり述べて置く。是れは、唯だ日本の事物が多く世人の思ひも寄らぬ外國から傳來

したといふ一例を示すに過ぎない。若しコウした事實を多く集めやうとすれば際限も無く、其れのみにも大きな一巻の書を成すとも足らぬ位である。

曾て横濱に住居した一西洋人は、自ら『おそば』の通人を以て任じ、そばの味を知らざれば未だ日本を知れりといふことは出来ない、といふて居た。實際そばは極めて無味な様で、而もスルスルと咽もとを通過する際の趣味といふものは又格別である。其めて平民的にして而も粹な處も亦其特徴である。是を以て能く日本國民性を發揮したものとさせる某外人の言は、蓋し妙を得たものと言へやう。

然るに此そばの名所を更科といひ、最近までそば屋の看板には必ず『更科』の文字が加へられたものである。而して此更科の名は單に日本に於て行はれるのみで無く、西洋諸國に於ても用ゐられて居る。佛蘭西に於ては、そばのことをサラザンと言ひ伊太利にては之をサラシノと稱する。私は此事實を不思議に感じて之を人に問ふた。スルと其れは昔時アラビヤから勃興して北阿弗利加を征服し更に西班牙までも

其權力下に服したるサラセン人が之を持つて來たので此名稱が付せられたのだといふ。アラビヤはニギノ命や穗々手耳命の生活した國であれば天孫民族には極めて因縁の深い處である。但しサラシナの名を持つたそばが古事記時代に傳來したものであるかドウかは分らないが、兎に角、ツラニヤン人に次でバビロン文明を開拓したセミチック人や、猶太建國者たるヘブリユウ人と同人種であるアラビヤ人よりして、日本の更科そばが持ち來されたことは争はれないと思ふ。

X

X

X

X

以上、私はカルデヤ文明から流を發した諸種の文物が日本にまで傳はつた事實を略記した。古事記神話がカルデヤから傳はつたことは勿論のことであるが、武器や、服装や、社會政治の諸制度や、短歌の様なものまでが、日本の太古に於て既にバビロンから傳來したことを想像し得るのは驚くべきである。更に其後に及んで傳來したる音楽や宗教も、其本源をたゞせば矢張りカルデヤから出て來たのである。吾等

し自らカルデヤの古蹟を踏査することが出来たならば、更らにドレ程興味あり又
貴重なる發見をなし得るであらうか。私は其大事業が日本人自ら發起せらるゝの時
機あらんことを熱望する。

空山不見人。

但聞人語響。

返景入深林。

復照青苔上。

第三章 太古西部亞細亞の形勢

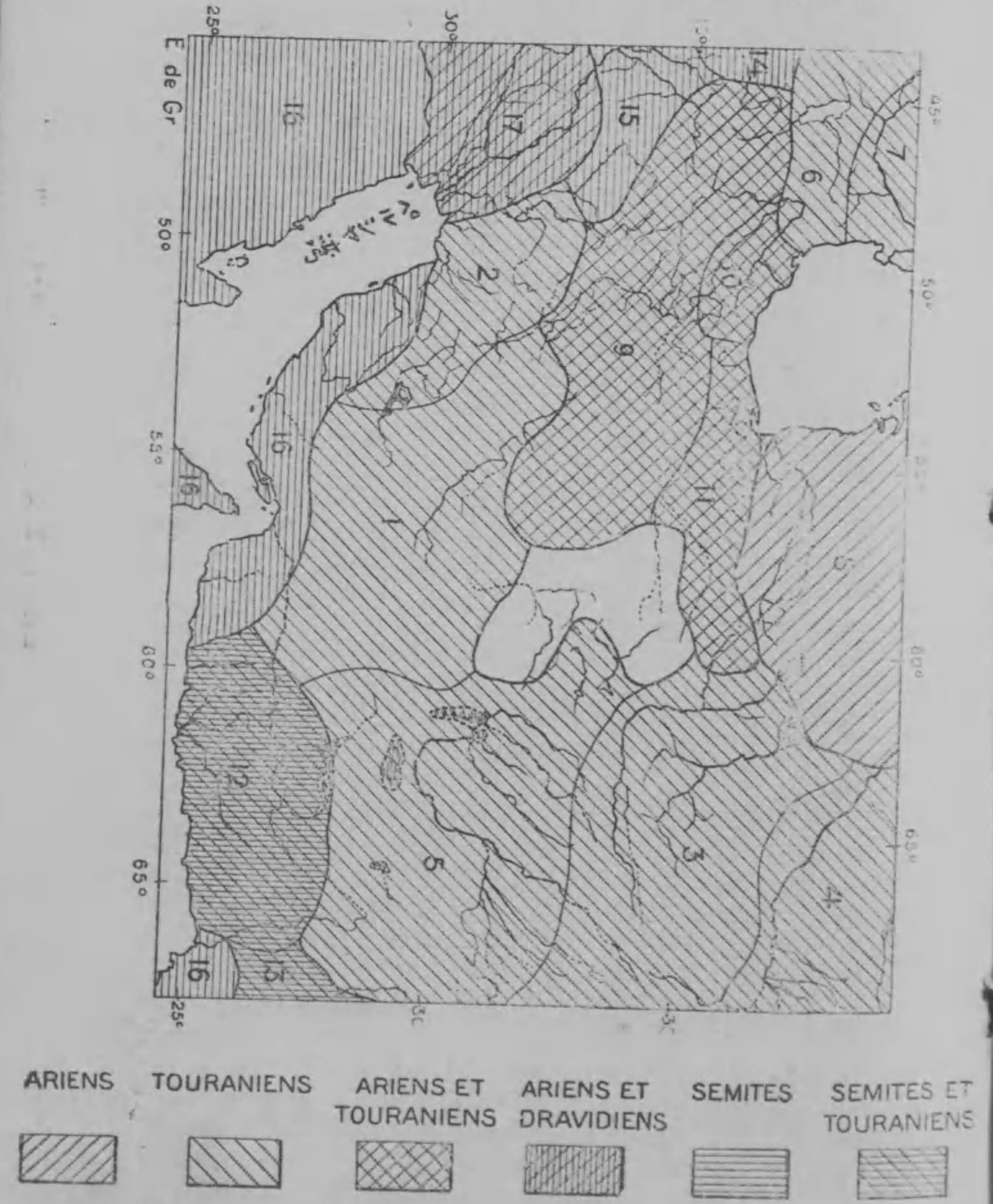
世界文明の曙光は西方亞細亞のペルシヤよりアナトリアに至る地方から發揚せられたることは、屢々記せし如くである。此地方は世界最大のバミール高原と程遠からずペルシヤ灣と印度洋を有し、チグリズ、ユウフラテス二大河を包容して西は直ちにイスス灣より地中海に通じ、北はキヤスピヤン海及び黒海に面して水上交通の便あり、西南は或はオロント及びジヨルダンの流域に沿ふて或はアラビヤの原野を過つて、シナイ半島の紅海に達するの便あり、印度洋の影響にて氣候は緩和せられ、降雨を多くし、植物の繁殖を豊饒にし、かくて總ゆる國の總ゆる人種の總ゆる言語の民族が集合し來り、茲に世界最古最大文明の端緒を開いたのである。

此メソポタミヤ地方に螺集し來れる民族の大部分は、或は其以前バミール高原を降下して來たのかも知れぬ。或は氣候の變化、生活の困難に追はれ、此高原に發源

する無数の谿流を辿つて四方に散り行きし一部の民族、が或は西方直ちにベルシヤ高原に降り、或はカスピヤン海東岸の地に移住したのかも知れぬ。ベルシヤの高原も太古の時代に於ては頗る多量の雨と水とを有して居たのが、時経るに従て乾燥し來り、其住民は漸次に此地を去りてメソポタミヤの水郷へと移轉することとなつたであらう。勿論ベルシヤの高原は今日も尙ほ生活し得べからざる程の難地に非ず、唯だ隣接せる沃地メソポタミヤを望んでは、之を地上の理想郷として慕ひ赴いたに相違ない。

『バミールの高原より、ポタミヤの平野一體に至る地方の人類學的研究によりて、吾等は其歴史開闢時よりして此に三種の民族の住居せしことを知る。セミチック、アリヤン、及びトウラニヤン、是れである。其内のセミチック人はザグロス連山の南麓に至りて其前進を止め、アリヤン人とトウラニヤンとは互にベルシヤ高原を占領せん爲に争ふた。但し何れの人種が先きに此地に來住したかは今日明白で無い。

太古西亞の諸人種



此トウラニヤンは、果して彼のアルタイ・トウラニヤン（タルタル、モンゴル、トルコ人、匈牙利人、フィンランド人等）と同血族なるや否や明證すると困難ではあるが、兎に角、彼等は、先づカスピヤン海の東南角を過つてペルシヤに入り、更に古代メデヤの地アトロパテンに侵入したとは事實らしい。而して更に南進してシユス谿谷地の上部を占領した。かくて之と同種族の『山人』即ちアツカド人は遂にメソポタミヤの平野に降り、此處に諸方より來れる諸民族と相接することとなつた。其諸民族の多くは南方及び西南方より移住して來たもので、其大部分は多少他種族と混化せるセミチツク人種であつた。（エリゼ、ルクリニ「地人論」第一卷四一六頁）

メデヤ地方に於て、アケメニデス王廳の命令によりて刻まれたる政治上及び行政上の記事には、アリヤンの上流語（即ち古代ペルシヤ語）が其儘使用せられて居る。乍併、ペルシヤ高原西北方に於ける被征服人民は、尙ほアリヤン語ならざる國語を長く常用して己まらず、ペルシヤの王は遂に之を帝國公用語の一として採用せざるを

得なかつた。今日尙ほ存する岩壁上の三國語並記の文書に於て、其波斯語に次で第二位を占むる國語は、即ち一種の接合語にして、専門家は、其頗るトルコ語法に類似することを認める。そして此國語は傳説を語る處の普通語として尊ばれ、四國語併記文書中には、アリヤン語の次位、バビロニヤ語の上位に置かれ、埃及語を最下位に置いてある。更に古代メデヤ國內の或る二地方に於て、多くの探検家は單一國語を以て書かれたる古文書を發見したが、其國語は、アリヤン人に征服されたる古代住民の用語即ちトウラニヤン語であると言ふ。

私は、古事記に出て居る天ツ神の一族は、今より三千五百年前にユウフラテス河の上流、カバドシヤ高原に本據を定めて一大帝國を成せるヒツチト人種なりと信ずるものであるが、其ヒツチト人は、右のトウラニヤン人種と血統を同じうするのでは無いかと思ふ。そして其トウラニヤンの一派アツカド人がペルシヤ高原を経てメソポタミヤに降りたると異なり、ヒツチト人は却てカスピヤン海岸を辿りてコオカ

サスの麓、シラ河或はアラクス河の河口に到達し、是より兩河に沿ふてアルメニア高原を登り、遂にユウフラテスの上流に及び、カバドシヤの地に巖穴生活の大部落を建設したのではあるまいか。

要するに此世界文明搖籃の地を争ひたる太古の民族を、今、假りに三大別して、右の説明を試みた。併し之を詳細に研究すると、カルデヤの地には既に黒人も來て居たらしく思はれる。蒙古人なども來て居たかも知れない。ヒツチト人は蒙古人種では無いかとまで考へる學者もある。併し大體に於て、之をアリアン、トウラニヤン、セミチツクの三人種が此地方を占領し、互に混入錯綜して居たことを知れば、目下の研究の爲には充分である。

第四章 古事記神話の地理

第一、緒言

私は前章に於て、世界最古の文明が東漸した有様を略説した。私は古事記の神話も亦此文明の東漸と共に移住して日本に渡來したものであると思ふ。其れは前段にも言ふた通りである。従て神代記に記されたる重要な地名人名の如きも亦其神話發源地及び其住民の名稱を採りたるもの多きは自然である。而して此の如き例は世界の歴史に屢々見らるる事實である。例へば米國のニュー・ヨークやニュー・イングランドは其英國の移住者が故郷の地名を追慕して同地に命名したる者なることを想像し得るであらう。又、米國のニュー・オルレヤンは佛國人の殖民地なりしことを直ちに想像し得るであらう。蓋しオルレヤンは佛國の地名である。サン・フラン

マソボタミヤ附近の地圖



古事記神話の地圖



シスコの名稱は亦西班牙人の命名せしものなること其發音法にて自ら明かにせらるゝであらう。されば、私の是より研究せんとする神話の諸地名が、西方亞細亞に存在せりとなすも決して不自然なる解釋では無い。吾が祖先の住居したる地名、或は遭遇したる人名等を長く記憶して、之を新たな定住地たる日本の諸地に命名するは極めて自然の人情である。殊に太古の醇樸單純なる人民が吾が祖先を憧憬し、祖先の地を追懐すること深きは近代人の想像も及ばぬ程である。されば西方亞細亞の地名や人名や出來事が極東の日本に傳はりて其地名や物語となつたといふことは決して不可思議でも、牽強附會でもないのである。

古事記神話に記されたる高天原民族移住の目的地、即ち約束の地たる『豊葦原の中國』或は『水穗の國』は、到底之を日本の國土に於て發見し得ない。日本の如き山岳的島國は豊葦原とは言へない。此島の周圍には葦などは茂つて居ない。又、茂つて居たとも思はれない。又神代記中に屢々遭遇する處のワニの傳説の如きも、決して

て日本に起つたものではない。コウした種々なる疑問を懐いて、私は神代記中の傳説の發生地を國外に求めた。最初私は『豊葦原の中國』といふのは支那のことでは無いか、とも思つた。即ち黄河と揚子江との中間地方ではあるまいか、と想像した。然るに支那人は自ら其國を中國と稱するが、豊葦原の中國とは言はない。天孫民族約束の地として古事記傳説に残る程の豊葦原の中國なれば、最初、顯著なる評判が行はれて居なければならぬ筈である。支那人の中國といふは世界の中心といふ意味で葦原に狭まれたる中間國といふ意味では無い。然るに世界の太古史を讀んで行く間に、私は忽ち彼のメソポタミヤの地に注意を傾けることとなつた。そして其れから其れへと連絡の道を通つて種々發見する處があつた。即ち是より其大體を序述しやうと思ふ。

第二、高天原

古事記神話の天照大御神が所知し給へるといふ高天原は何所であらう。吾等は吾等が祖先の地として此高天原の名を知れども、其何れの地に在りしか、曾て學者の明示せる者あるを聞かない。高天原を單に高原、或は天界と解釋して了へば其れまではないある。併しながら、苟も歴史上の事實、或は傳説として研究する以上は、之を實在として穿鑿せねば心がすまぬ。

高天原は之を詩或は歌の文字として見れば、極めて面白い、品の高い文字であるが、之を事實の記載としては、如何にも解釋し難い文字である。私は古事記の筆者が、『タカマノハラ』といふ音に『高天原』の文字を當てはめた苦心と技能とに深く感ずる者であるが、併し之を以て學究的欲望を満足することは出来ない。

高天原を以て地上の高原と解釋することは私の素より反對せぬ所である。併しながら其高天ノ原と歴史家の記したものを何故に地上の高原と解釋するか。之れには確實なる理由が無くてはならぬ。私は先づ其『タカマノハラ』といふ字音の意義から

始めて研究して見たい。私は『タカマノハラ』の字音に當てるに『嶽間の原』の文字を以てしたい。之は元より研究上の便宜からのもので、吾等の祖先の詩的憧憬の對象を表示するには『高天ノ原』の文字がどれ程適當して居るか分らない。

併し、私が『嶽間の原』といふ文字を用ゐるに就ては研究上の便宜の外に尙ほ種々なる理由がある。私は『タカマノハラ』を以て小亞細亞ユウフラテス河上流の一地點にありと信する者であるが、此地を指示するには『嶽間の原』てふ文字が適當して居るのである。抑もコウカサス地方、アルメニヤ地方に於て、高山を *Dagh* と稱したると今日より之を想像することが出来る。例へばコウカサス連山の北方、カスピヤン海に面したる地方を *Daghestan* と稱し、又同連山南方に *Bingoldagh* と稱する高山あり、更にユウフラテス河の上流、ハランの都を北方に去る四五十里の地に、*Karadia-dagh* あり、之を顯著なる例とすることが出来る。ダゲスタンは即ち山嶽の意、ビンゲルダクはビンゲル嶽の意なることを知らば、私がユウフラテス上流

にありとする『タカマノハラ』を『嶽間ノ原』と書するも決して無理ではあるまい。或は『高』も『嶽』も其語原は一に歸するかも知れず、又、何れの文字を用ふるも意味には大なる相違なければ、説明に便利なる文字を採るが最も適當とせねばならぬ。

然らば私は何故に此高天原がユウフラテス河の上流に在りとなすか。之にはユウフラテス及びチグリヌ兩河流域の歴史地理及び、同地方民族の状態等から説明して行かねばならぬが、複雑を避くるが爲に、茲には唯だ『高天原』といふ吾等祖先の神都を直示して置く。耶蘇教舊約聖書の創世記中に、ヘブリユウ人の祖先としてアブラハムの名がある。其アブラハムが住居した國の名を『ハラシ』又は『カラン』といふ『ハラシ』の國(或は都會)は即ちユウフラテス河の上流に位し、東はバビロン、ベルシヤ、印度、西は地中海諸地方、南方はオロント、ジオルダン河を経て鑛業地たるシナイ山や埃及にまで達し得べき、交通の十字道頭になつて居た。私は

此高原を以て吾等が祖先の地と見做したい。

一たび地圖を披けば一目瞭然たる此交通の十字交叉點にして而も一大高原たるハラシは即ち天照大御神の知しめしたる高天原では無かつたか。即ち高山間に狭まれたハラシの都を以て、嶽間の原(ハラシをハラと變じて)と見做す事は出来ないか。佛領印度支那の東京を日本流に發音すれば『トウキョウ』と讀まれる如く Haran の『ン』の發音を變じ或は省いて『ハラ』或は『ハラ』と稱するは極めて尋常の發音法である。佛人が『ム』の發音を省略すること多きは人の知る處である。例へば monsieur を『モツシユウ』といひ、Lamannais をラマネーと稱するが如き是れである。此く諸例を引き來る時は Haran をハラと稱するも決して無理の解釋とは言はれない。

高天ノ原がアブラハムの故郷たるハラシの都であると見做すべき理由は尙ほ多數の事項によりて説明することが出来るが、其は神代記の説明全部によりて始めて了

解せらるべきものなれば、茲には詳説しない。茲には唯だ私が此地を以て古事記神代記の發生地と見做すに至れる動機を示すに止む。私は古事記の天津神が統治の目的とせられたる『葦原の中つ國』を以てチギリス、ユウフラテス双流の地方、即ちメソポミアなりと見做し、猿田彦神を以てカルデア民族となし、大國主神とはカルデアのオルクハム祖神とヘブリユウのアブラハムとを合せたるもの、須佐之男命は波斯灣頭シユス國民の祖なりと考へ、刺國大神は同じくシユス國の首長たりしと信じ、思兼の神は其性格極めて基督教舊約書のモオゼに似たりとし、月讀命が統治すべく指定せられたる『夜の食國』^{オスクニ}とは高架索山中の『オス』民族の國と見做し、天照大御神はギリシャの祖神ヘレス女神とカルデアの女神アスタロス（イスタル）とを合體せるものと信じ、大和民族は今より三千年前、アルメニヤの高原を下りてバレスチンの谿谷或はダマスの砂漠を通過し、ヘブリユ人と混じつゝ遂に高千穂宮に定着したりと見做し、其高千穂とはシイナ山を其一部とするジユベル・エル・チフ

の事なりと信ずる者である。されば是等の論證によりてハランの地が大和民族最初の首都なりしことは餘り牽強附會せずとも自ら明示されるであらう。

更に一の重大なる論據は、大和民族の祖先は、今より三千五百年前に此地方に強大なる帝國を建てて四方に雄を揮ひたる『ヘト』或は『ヒツチト』民族であつたらうと云ふこと是れである。此ヘト國民が遣せる兩頭の鷲（予は此兩頭の鷲を以て彼のヤタ鳥なりと主張す）の石像は、近代史上に雄を揮ひたる獨、露兩武斷國の國章として採用せられたのである。小亞細亞山嶽地方、カバドス地方には今日尙ほ同民族石屋生活の跡を存すといふ。而して其石屋生活の跡と、古事記の天の石屋戸の神話を對照すると自ら合點されることが多い。尙ほ之に就いては、詳細なる説明を要する。

余は高天ノ原をユウフラテス河の上流『ハラシ』の都であると論定したが、併し古事記の記事は多く口傳の説を修飾列記したもので必ずしも明確では無い。亦た太

古の人民が其移動するに従て民族の崇拜點たる高天ノ原も度々移轉したかも知れない。最初の高天ノ原は更に北方或は西方の山間であつたかも知れない。或は更に東方に遡つて、バミール高原であつたかも知れない。

第三、夜の食國

夜の食國は天照大神の弟戸讀命の統治國として指定されたる國である。私が歐亞漂浪中携へ持てる『古事記讀本』の著者は之に註釋して曰く、ヲス國とは御孫命の知しめす此天の下をすべるといふ稱にしてヲスは元と物を食ふことなり、偕、物を見るも聞くも知るも食ふも皆他の物を身に受入るといふ意ゆゑに……君の御國を治めたもちますを知らずとも、をすとも、聞しめすとも言ふなり』と。然しかく解する時は『汝命は夜の食國をしらせ』との神語は意味をなさず。知らず國を知らせ、と言ふことになりて、同語を重疊せる拙劣なる語句とならん、私は此『ヲス國』を

以て當時コウカサス山中に生活せる『ヲス人の國』と解釋したい。地理學、社會學の泰斗エリゼ・ルクリュは此コオカサスに就いて記して曰く『人類歴史の起原より、キヤスピヤン海とユクセン橋(黒海の事)との中間の山脈は南北兩面によつて全く反對せる性質を現した。即ち南面は文化光明を表し、北面は野蠻暗夜を徴表した』而して此山中に於けるオス人に關して曰く『歴史の起原よりして、自らイロンと稱するオス人が此山脈の横斷點(即ちクラ河とテレス河の兩水源の接近せる地點)に強固に定住し、出入兩面の通口を占領したることは、疑無しとせらる』此山間の國が太古に於て夜の國と呼ばれたると、古事記の『夜の食國』の語とを参照すれば自ら合點することが出來よう。此ヲス國人は古事記神話に重大なる地位を占めて居らねば茲には右の説明にて充分である。唯だ此民族が如何にしてユウフラテス河源の高天ノ原と交通せしかは一言せねばならぬ。歴史家の研究によると此民族は商業仲介を以て其職業となし、此民族の仲介によりて高架索地方と西北方遙かに隔てたバル

チツク沿岸地方との間に古代より規律ある貿易が開かれて居たこのことである。されば此民族がアルメニヤ山間の高天原の民族と交通せるのみならず、其統御の目的となつたことは之を推察することが出来る。

第四、葦原の中國

高天ノ原の天津神等が統治せんとした最大目的地即ち約束の地は葦原の中國であつた。而して其葦原の中ツ國とは即ち今日世界第一に豊饒の地と稱せらるゝメソポタミヤであると私は信ずる。今回の世界大戰に際して英軍は波斯灣より攻め上つたのであるが、高天ノ原の大和民族はユウフラテス河の水源地から征下したのである。何故に葦原の中國をメソポタミヤと見做すか。第一に葦の繁茂した廣原にして而も二河に狭まれたる中ツ國は日本には存在しない。第二にチグリス河とユウフラテス河との流域は世界最古の穀物耕作地であつた。埃及の如きも此メソポタミヤよ

り遙かに移住し來れる民族により穀物耕作法を學んだらしいと歴史家は言ふ。第三はメソポタミヤといふ希臘語の語意が又中ツ國の意に合致する。即ちメソは其中間の意、ポタミイは水流の意にして、中ツ國といふ語はメソポタミイと言ふ希臘語と一致するのである。第四、此メソポタミヤは太古以來地上のパラダイスとして四方の民族の野心の目的となつたこと史蹟の明示する所である。豊葦原の中ツ國は即ち今日の英國民が必死の努力を以て占領せんとするチグリス、ユウフラテス兩河の流域であつたといふことには、人も反對することは出来ぬであらう。メソポタミイの語は希臘語ではあるが、此兩河の流域を中間國と呼ぶ習慣は既に太古より同地方人間に普及して居たに相違ない。而して希臘人は其地方人の慣用名稱を其儘採用したのであらう。今より六七千年前に此地方に住居せしスメル人は、此地を『ケンジ』と呼んだ。『ケンジ』とは溝と葦との國といふ意味だと學者は言ふ。そして其『ケンジ』は之を日本の優雅な發音法に従へば『ケニ』となり、『ケニ』は直ちに『クニ』

と變化する。そして此『ケニ』は即ち『國』の語源をなしたるものであらう。『水穗國』の名稱も亦是から出來たに相違ない。されば私がカルデヤ人と見做す所の猿田彦神やアツシリヤ國都たりしシユスの祖神と見做す所の刺國大神が、此葦原の中つ國より出でたるは當然である。チグリス河畔のニニヅの都には有名なるサルダナバルといふ王様さへあつた。チグリス河に近きシユス(或はスサ)の都を中心としてアツシリヤ帝國は四方に雄を振つた。而して日本に渡來して一新王國の建設を企てる天津神達が果して直接に是等の諸國と交渉したのか、或は唯だ其傳説を傳へたのみか此點は明白では無いが、兎に角、神代記の記事に葦原の中津國と稱するはメソポタミヤのことであること、猿田彦神はカルデヤ人のこと、大國主神の父、刺國大神がシユスの祖神なるべしとの推定は、疑を挾むの餘地が無からうと思ふ。

第五、出雲の國

出雲の國は須佐之男命の結婚地、「八雲立つ」といふ戀歌の地である、が實際何れの地であつたらうか。須佐之男命は天照太御神と御兄弟であつたが、高天ノ原を去られて出雲の國に渡られた。此出雲の國は後に大國主神の居所となつた。而して其時代には高天ノ原民族との間に種々なる交渉が行はれ、前者は後者を懐柔する爲に随分苦心したらしい。須佐之男命が須賀の宮を建てたる。又、其後裔たる大國主神の住所たりし出雲の國は、少くとも高天ノ原民族の目的地たりし葦原の中ツ國と接近して居たに相違無い。私は大國主神の父神たる刺國大神を以て『シユス』國の首長と信ずる者であるが、其『シユス』の都はケルカ河(チグリス河に投合する)の沿岸にある。太古に於ては、波斯灣が此シユスの都まで達して居たことである。而して『大國主神、出雲の大の御前ミサキに坐す時に、波の穂より天之羅摩船に乗りて……歸來る神あり』(古事記)との記事に徴せば、出雲は海邊を占めたる國であつたに相違無い。又、『天鳥船神を建御雷神に副へて……出震國の伊那佐之小濱に降到て云

々』とあるも同様の想像をなさしむる。ソコで私は是等種々なる記事を綜合参照して之を波斯灣の邊りに求めた。然るに猶太創世記 地圖に依りて、アラビヤ國ベルシャ灣口なるオマン半島に *Saba* の地名を發見した、*Saba* は或は *Sabeen* 人の名を採つたのかも知れぬと思ふたが、併しサベアン人の地は南方にサバとして表示されてある。ソコで私は直に合點した、是れを須佐之男命が詠じた『八雲立つ』出雲の國である。と云ふのは、*Saba* はアラビヤ語の *Sehala* 即ち雲と同語であらうと考へついたからである。現にアラビヤ語のスアバは創世記のスバ或はセバと實際差別無く耳に響く。アラビヤの大部分が大砂漠を成して常に乾燥を極むるに對し、此オマン半島及び紅海と印度洋とに挟まれたるアデン半島の地は、印度洋ムウスン風の持ち來る雲霧によつて毎日午前中は地上を浴すると云ふ。さればアラビヤの住人は此雲霧を以て天來の恵として崇め尊ぶのである。日本最初の詩歌たる須佐之男命の戀歌にも彼が如何に其地を包み圍める雲霧を嘆美したかが想像される。メソポタミヤ

の沃地を去りて、乾燥を極むる砂漠を眺めつゝ漸く此オマン半島に辿り着き、測らるもアグダル山の綠葉に烟れる様を望み見たる時、我が心すがすがし、と叫んで遂に茲に須賀の宮を建つるに至れるは眞に須佐之男命の雄大なる生活であつた。尙ほ太古に於ては、オマン半島の突角はベルシャの地と接壤して居たかも知れない。そして出雲とは此ベルシャ灣北岸一體をも含んで居たかも知れない。

オマン半島と砂漠地方とを遮斷して北半島を保護するジエベル・アグダルの名は甚だ意味が深い。ジエベルはアラビヤ語の山にして、アグダルは即ち青緑の意である。大國主神が其協同者たる少名毘古那神を失ひ哀傷に沈める時『海を光らして依り來る神あり、其神言ひ給はく、御前を能く治めてば吾共與に相作り成てん……吾をばも、倭の青垣東山の上に伊都岐奉れと言ひ給ひき』(古事記) 此青垣東山こそ實に今日アラビヤ人の呼ぶジエベル・アグダルでは無いか。即ち其名稱が『青緑の山』なると同時に砂漠地方に對する乾燥防禦の垣をなし、又當時の其國に於ては之が東

の地であつた。

第六、根之堅洲國及高志國

須佐之男命は『海原をしらせ』よと命せられたが、之を好まず、母の國たる「根の堅洲國に罷らむと欲ふて」哭いたと云ふ。又大國主神は兄弟の爭議にて難境に陥りし時、祖神の告げに隨ひ、須佐之男命の坐ます根堅洲國に到りて其助力を求めたとある。此根之堅洲國とは何れの地であらうか。之を出雲の國と同一視することは勿論出来ない。大國主神の一族は當時、波斯灣沿岸からメソポタミヤの下部地方を占領して居たと思はれるが、堅洲國は之より遙かに隔たりたる所と思ふ。『古事記讀本』（加藤高文著）の註釋には『根は下つ底にあるを云ふ、カタス國は片隅國の意なり』とある。是れは極めて曖昧な解釋といはねばならぬ。根は下つ底にあるといふは可として、カタス國を片隅國とのみ解したのでは、何れの方向の片隅なるや不明

である。高天ノ原から見て根の國といふは何れにしてもアルメニヤ山の下方に位すること勿論である。然るに此アルメニヤ連山は極めて廣大に跨り居れば堅洲國の地位を定めるのが甚だ困難である。唯だアルメニヤ山の南方は一體にユウフラテス及びチグリス兩河の流域を成して之を葦原の中つ國と稱する以上は、堅洲國は他の方面に位するものと見ねばならぬ。サテ私が高天ノ原民族として指定する『ヘト』或は『ヒツチト』民族はセム人種でもアリアン人種でも無く、タルタルか或はモンゴル民族に屬するとの事である。要するに古代の文明人が呼んでテウラニヤン民族と名くる總稱中に含まるべき人種であつたことと思ふ。而して此民族の大部分が中央亞細亞から起り、カスピヤン海の東岸を傳ふて或は波斯高原に出で、或はアルメニヤ高原を過ぎて小亞細亞まで進入し、かくて到處にアリアン人種、セミチツク人種と接觸して、茲にカルデヤ文明を醸成したのであらう。されば須佐之男命の母の國といふは此トウラニヤンの國といふ意味になるであらう。而して根の堅洲國とはカス

ビヤン海の東北方の國を指すことになる。かうなると堅洲國の語が活きて來る。元來西部シベリアの地は太古の時代には堅氷を以て蔽はれて居たといふ。其堅氷に蔽はれてる地を茲にカタス(堅氷)國と稱したので、古事記の記が之を堅洲國と記したのは極めて巧妙な用字法であつたと思ふ。アルメニヤ地方に於ては河川の普通名詞に『ス』の音が用ゐてある。例へばユウフラテス河の上流を『カラス』と呼ぶ如き其一例である。(カラは黒、スは水又は河の意なり)要するに古事記の堅洲國といふは堅氷に蔽はれたる國の意にて、南西部西伯利亞の地を指したものであらう。併し大國主神が訪問したる須佐之男神の住所が果して西ベリヤであつたかと言へば其れは如何かと思はれる。又強ちかく解するの必要は無い。祖先傳來の傳説によりて昔時住居せる方向を指して一體に堅洲國と稱したかも知れない。コロムブスは、亞細亞、印度に到達した積りて亞米利加の地を印度と稱した。高天ノ原も天の安の河原も幾ヶ所もある如く、堅洲國の地位も變じて來たであらう。そして大國主神が訪問

した所は波斯の高原邊になつて居たかも知れない。

高志國は越の國だと古事記讀本の註解にある。『越』の文字は最も適當して居ると思ふ。然し前段からの解釋に準じて行くと、其越の國は決して日本の越前越後等の地方では勿論無い。古事記讀本の註解(加藤高文氏)に『高志國は越國なり、後に越前、加賀、能登、越中、越後など、分れつれど歌には猶なべて越とよむなり』とあるは、日本國土の事としては了解できるが、古事記神話の解釋としては合點が出來ない。ソコで私は高志國の所在を葦原中國即ち今のメソポタミヤから根の堅洲國の方向に達する道筋に於て搜索した。そして私はバビロン帝國と中央亞細亞との唯一の交通關門なるザグロスの關近傍一體の山嶽地方に於て之を發見した。波斯灣北岸よりチグリス河東岸に沿ふて幾重とも無く皺波を成せる大連山がある。地圖には之をザグロス山脈と記してある。ザグロは即ちアラビヤ語のザガルより由來し、其のザガルとは、即ち谿道の意味だといふ。此山岳地域に太古より引續いて住する人

民をコセと稱する。バクチアリと稱せられるのも亦同一民族であらう。歴史上此コセ人は或はカルデヤ或はアッシリヤ或はエラミット或はベルシヤに從屬したが、併し其れは唯だ名義上のみであつた。何れの主權者たちも唯名義上の統治のみにて其虚榮心を満足せざるを得なかつた。而して此自然の城壁重疊せる地方には曾て攻入することが出来なかつた。其れのみならず、彼の波斯王アケメニデス王朝の最盛最強の時代に於てすら、其エクハタンからバビロンに到り、ベルスボリスからシユスに到る場合には、何時も此コセ人に通行料を支拂はざるを得なかつた。實に此コセ地方を越すことは單に自然地理上に於て難關たりしのみならず、社會的に又一難關であつた。されば此難越のコセ人國に與ふるに「越」の字を以てし、之をコシと發音するのは眞とに正當なる順序である。古事記讀本の註釋が高志は越なりと言へるは此點に於て結構至極である。此く考證して來ると、越の國は出雲と堅洲國との中間に位し、八千矛の神即ち大國主神が高志の國に沼河比賣を訪ひたるは即ち其堅洲國

訪問の時に際してのことであることが了解される。此高志國に就ては別に一章を設けて説明する。(第六章)

第七、高千穂

高千穂の蜂は倭民族の生靈に一新紀元を劃せる所なれば、歴史研究の上には重大なる意味を有する。然らば其日本歴史上に最も神聖なる意義を有する高千穂は何れの地に在るか。私は之を搜索する爲に、天孫民族が岩窟生活を棄て、猿田彦神を案内者として高千穂に到着するまでの道筋を考へて見た。是に關する古事記の記事は極めて簡單である。『故爾カレコに天津日子番能ニニギノ命、天の石位を離れ、天の八重多那雲を押分けて、伊都の知和岐ちわきて、天の浮橋に、うきじまり、そりたゝして竺紫の日向の高千穂のくじふるために、天降りましき』古事記の記事はかく簡單であるが、併し實際此旅行に費したる時日は數十或は數百年に達したであらうと思ふ。

私は今此族を、彼の『ヘト』民族（ヒツチト民族）移住の跡に依りて考照して見たい。今より三千五百年前、ユウフラテスの上流シリヤの高原を中心として四方に雄々揮ひたるヒツチト民族は埃及、アツシリヤ兩強國より狭撃せられて滅亡するに至つた。之に就いて碩學エリゼ・ルクリュは曰く『埃及人の壓迫を受けて、既にシリヤの優勝者たる地位が動搖し初めた時に、彼等は更に他の恐るべき隣國アツシリヤの襲撃に遭ふた。而して數世紀間に亘れる其防禦は彼等を甚だしく疲弊せしめた。そしてカルケミシの都（ユウフラテス上流の沿岸にあり、ハラシ市より遠からず）の陥落を以て其國民的生活は最期を告げた。此争亂はメソポタミヤとシリヤ海岸とに住する兩セム民族間の商業を全然遮斷するに至つた。さればアツシリヤの諸王は其最大の希望としてユウフラテス上流の歴史的大通路を自己の利益の爲に開通する必要があつた。かくて今より二十六世紀前には。此ヒツチト民族は既に全然絶滅して居た。其勢力は永久に破壊せられ、或は服従し、或は遠方に散亂するに至つた。既

に之に先つて、彼等の一團はアモレの國（パレスチアの南方死海に近き處）の南方に其避難所を求めヘbron山の邊りに定住するに至つた。かくて、イスラエルの子孫の交渉を生じ、更にユダヤに滞在し土着の民と混血して漸くセミチツク化し、かくてゼルザレムの建設にヘブリユウ人と協力するに至つた。』（地人論第二卷三頁）以上の記事は私が天孫民族の祖先と見做す所のヒツチト民族旅行の道筋を示したに過ぎない。日本に渡航して新帝國建設に著手した一團體は今より三千三百八年前のカデク戦争（埃及との）以前に既にシナイ半島に達して居たかも知れない。尙ほ後章に詳説する。

古事記の記する處は極めて簡單であるが、之をルクリュの記する『ヒツチト』移住の事實と参照すると自ら其光景が想像される。カバドシヤの天の岩位を離れ、シリヤの高原を棄て、八重多那雲を押分けてオロントの谿流を攀ぢ、シヨルダンの沿岸を辿り、天の浮橋即ち死海を航海して漸くシナイ半島アカバ灣頭に近き日光輝やく

暖かい地に着いて、茲に其居を定めたのであらう。ヘロドタスの『歴史』には黒海を
ユクセン橋 (Pont Euxin) と記してある。天孫民族が最初小亞細亞に住する時に、
天の浮橋と稱したのは黒海の事かも知れない。併し彼等がパレスチンを旅行するに
當つては、天の浮橋と稱すべきは死海の外に無い。かくて此浮橋を渡航して彼シ
ナイ半島を形成するくの字形の山嶺を據城と定めた。此くの字形の連山を私は高千
穂の峰と認めるのである。今日アラビヤ人は之を *Djebel el tin* と呼ぶ。ヂエベルは即
ち山、エルは冠詞、チフは即ち山の固有名詞である。之を倭民族流に呼稱すれば即
ち『タカチフ』となるのである。再言すれば、アラビヤ語のヂエベル・エル・を取
り除いて、其と同意義の『嶽』(音便法によつてタカと變ず)を代用すると即ち『タ
カチフ』の名が出て來るのである。

併し右の道筋はエリゼ・ルクリュがヒツチト民族に關して記せる處に準じたので
ある。古事記に依ると山を降りて直ちに海に出で、地中海を渡つてシナイ半島に近

い海岸に着いたとも解釋が出来る。「伊都の知和岐ちわきて」はイススの地を分け出
でてイスス灣(後にアレキサンドル灣となるパレスチンの北方アマニユス山の西北
にあり)から乗船した事とも解せらる。さうなると『天の浮橋』は地中海のことにな
らねばならぬ。かく解すれば其道案内者たる猿田彦神の歸り着くべき處は此イスス
の地で無ければならぬ。日本古來の解釋は猿田彦神の故郷を伊勢の國とするが、其
イセは即ちイススの地、イスス灣と酷似する。イススの北方、黒海沿岸の地を太古
の世にクマヌと稱したるも、古事記の熊野と思ひ合はされて面白い。亦た此イスス
の港には既に多數のカルデヤ人が來住して居たに相違無い。カルデヤ人は既に伊太
利の西方に移民して居た。今日のサルヂニヤは即ち其れである。サルドはカルドと
同語である。サルヂニヤ島は即ちカルデヤ人の殖民地なることが分る。

右の如く、我天孫民族移住の道筋に關しては二様の解釋が出来るが、何れにして
もパレスチンの海か陸かの差に過ぎない。そして其到達せる地點はシナイ半島であ

つた。此に高千穂の宮が築かれたのである。是れ今日此山をアラビア人がヂエベル・エル・チフと呼ぶ所以である。高は嶽、語或は同意義にして即ち之をアラビヤ人がヂエベルと呼び、千穂の固有詞に冠詞を添へて之をエル・チフと呼びたること既に述べた通りである。其地理的關係は更に後の説明によつて一層明白になるであらう。

第八、笠沙之御前

笠沙之御前は天孫民族移動の形勢を知るに尤も重大なる關係を有する。古事記の記事によると倭民族は高千穂から更に此笠沙之御前まで旅行して居る。但し初めて高千穂に宮居せしニニギの命に次ぎ、日子穗々手見命は此に五百八十年留まつたところある。されば笠沙之御前と高千穂の峰との間には常に交通はあつたが、本據は矢張り高千穂にあつたらしい。然らば此『カササの御前』とは何處であるか。古事記に

はこゝに脊肉^{フジシノカラクニ}韓國を笠沙之御前に眞來^{マキ}通りて、詔りたまはく、此地は朝日のたゞさす國、夕日の日てる國なり。故此地ぞ甚吉地と詔り給ひて云々』とある。脊肉とは何の事か私は知らない。韓國は空虚國^{カラ}の意だと古事記讀本には註してある。空虚國の解は甚だ面白い。併し私は更に實際的具體的に解釋して、之を不毛砂漠の國と考へたい。アラビヤの大砂漠の火山岩で蔽はれたる部分を『ハラ』と稱するが、其ハラをカラと發音するはセミチツク人の常習である。例へばアブラハムの故郷ハランの都をカランと發音する如き是れである。亦現にアフリカのアラビヤ人は砂漠をサハラ或はクラと呼ぶ。然らばシナイ半島を立ちてカラ國即ち砂漠を直過して到達すべき崎は即ち彼の紅海の入口、バベルマンデブの邊で無ければならぬ。即ち彼の植物及礦物に甚だ富みて古來『幸^{さい}のアラビヤ』と稱せらるゝ地方に之を求めねばならぬ。此に於て私は『カササの御前』の文字に就いて考へた。そして計らずも其『カササ』てふ文字の解によつて茲に此崎を發見すべき手掛りを得た。是は『カササ』に笠沙の文

字を當はめた爲に頗る難解の文字となつたのである。私が所持する唯一の参考書たる古事記讀本には一語の解釋をも付せず黙殺してある。然るに私は今アラビヤ人のモロッコ國に旅行の故か、此文字をアラビヤ流に讀む事に氣が付いた。そして『カササ』の『カ』を『ササ』と引離して見た。すると此『カ』は即ちアラビヤ語のカツ或はシャト、佛語のコオト、日本の潟カクにて、海濱を意味することが分つた。又『ササ』はアラビヤ語の『サド』即ち幸さいを意味することが分つた。アラビヤ語の『サド』或は『サダ』(サドの女性名詞)と日本語の『サチ』(幸)とは語源を同じくすると私は信ずる。そして古事記の『カササ』は即ち『幸の濱』といふ意味であると思ふ。『カツ』が他の語と合して一語を成す爲に『ツ』を省略され、『サダ』が『サグ』或は『ササ』と變じて茲に『カササ』の語が出来たのである。『カササ』の崎を『幸の御前』と解する時は、是を世界文明史上バビロンや埃及と同様に重要な地位を占むる『幸のアラビヤ』と見做すことは決して不思議では無い。處が更に私は喜ばしい一事を發見した。それは『幸

のアラビヤ』の一地角即ちアデン崎の隣に Cheik said シキ といふ崎の存することである。其シエイク・サイドとは『幸の長』といふ事である。サイドはサドと同意義で唯だ前は形容詞、後は名詞たるに過ぎない。此幸のアラビヤの『幸の長』こそ其昔『幸の御前』(カササの御前)と稱した處では無いか。實に『朝日の直たさす國、夕日の日てる國』と稱するに相應しいでは無いか。此『幸の御前』を此地ぞイト吉き地と詔り給うたのも亦理では無いか。

更に『カササの御前』が紅海の邊にあるべしとする他の一大理由がある。ニニギの命が『カササの御前』にて木花咲哉姫と婚し、皇子穗々手見命を擧げたが、其穗々手見命が上つ國に出幸まむせむとするに當り、之れを送り奉りたる者は、即ち一尋ワニであつた。此の話は甚だ伽話の様に聞えるが、併し研究者の爲には重大な證據である。蓋しワニは當時の世界に於て紅海岸か印度洋の外には存在しなかつた、又其ワニの名はカルデヤの傳説にある魚神(船舶の守護神) Oannes (オワネ) から出て居る

と思ふ。又『其ワニ歸りなむとせし時に佩せる紐小刀を解かして其頭につけてなも返し給ひける故、一尋和邇をば今にサヒ持の神とぞいふなる』（古事記讀本七十六頁）と古事記にある。そして其サヒは劍であると註解してある。私は又此サヒの文字がアラビヤ語のシユフ即ち劍と同語原をなして居ると思ふ。カササの崎が高千穂即ちシナイ半島から砂漠を直過して達する所なること、ワニが紅海岸或は印度洋の外には生存せぬ事實、ワニの名がカルデヤの傳説から出たこと、又其ワニの副名をサヒ持と呼び其サヒは即ちアラビヤ語のシユフなること、等の理由を綜合すると、『カササの御前』が幸のアラビヤ（古名）の突角なる『幸の長』御前であるといふことは、蓋し當らずと雖も遠からずである。其「カ、ササ（或はサダ）」の崎が天孫民族の移住と共に日本に到着して、大隅の『佐多の岬』が出来たのである。

第九、紫　　築

天津日子番のニニギの命の移住記にある築紫の日向の高千穂がシナイ半島のチフ山であること既に述べた所である。然らば何故に此地方を『ツクシ』と呼んだか。古事記に特に築紫の日向と記したるは深く注意すべきである。私の意見では、『ツクシ』は『對クシ』である。紅海の兩岸に相對して住居したる『クシ』民族のことである。舊約聖書創世記によるとノアの子にセム、ハム、ヤベテの三子あり、其ハムの子にクシだの、ミツライムだの、カナンだのといふ子供があつた。而して創世記の記事に徴すると此クシ民族は紅海の兩岸に住居してゐた。ラルウスの辭典によると『ヘブリユウにては ^{カウシュウ} Kaoushou 或は ^{クシユウ} Kousshou と稱す。其人種はセミト或は印度歐羅巴人に酷似す。今日に於ては、埃及人、下部ヌビイのバルブラス人、アビシニヤ人、チュニジイ及びトリボリのベルベル人、カビル人、及びモロツコ人等は蓋し之を代表する』されば古事記の傳説が高千穂の峰、日向の國のあるアラビヤ及びアフリカの一部を築紫即ち『對クシ』と記したのは、之を舊約聖書の記事と相照して當時

の住民の分布、移動を能く説明するのである。而して此築紫の名は倭民族が今の九州に到着すると同時に茲に上陸土着したのである。

弄日臨溪坐。尋花遶寺行。

時々聞鳥語。處々是泉聲。

第五章 海原の國

第一、古事記と書記

古事記に須佐之男命をして統治せしむべく指定された國として『海原』の名が掲げられてある。此事に就いて少しく私の所見を述べなくてはならぬ。

古事記の記事は次の如くである。「伊邪那岐命、いたく喜ばして……天照大御神に賜ひて詔り給はく、汝命は高天原をしらせと……次に月讀命に詔り給はく、汝命は夜の食國をしらせと……次に建速須佐之男命に詔り給はく、汝命は、海原をしらせと」然るに書紀の本文には『諾再二尊共議して、天下の主者を生まんとして、日神大日靈貴、月神月讀尊を生む、並ひに光華明彩なり、故に授くるに天上の事を以てす。次に蛭兒を産む云々、次に素戔嗚尊を生む、勇悍安忍にして宇宙に君臨すべか

らすとて、遠く根の國に適ねとて之を逐ひ給ひき』とあり、また同書に参照した第六の一書には『三子に勅任し、天照大神は高天原を治すべし、月讀命はアノクナヒ滄海原、潮の八百重を治すべし、素戔嗚尊は天下を治すべしと宣ふ。是時素戔嗚尊年己に長け、復、八握鬚髯を生じたるに、天下を治めんとはせずして、常に泣きいさち悲恨み給ふ。諸命何故に常に此く啼くかと問ひ給へば、對へて吾は母に根國に従はんと思ひて泣くとのたまふ。』とある。

第二、久米博士の説

然るに我が古代史の權威久米邦武博士は、其記事の『海原』は新羅である事を主張して次の如く言つて居る『かく、まぢくの傳へとなりたるは、海原が新羅なることの早くより晦くなりたるによる。是までの解者は根國を出雲とし、堅洲をば傍の洲などと解して、三韓の本國なるを知らず。蓋し新羅の國は韓の東海岸にて、金

城の港より北は元山まで巖石の海より峙ちたる處なるを以つて堅洲國といひたるなり。故に余は書紀の著者の異聞とせる第六の一書の記事を以て却つて事實を傳へたるものなりと信するなり。……故に第六の一書の『素戔嗚尊は天下を治すべし』とあるは、諾尊が天照大神の和徳を喜びて天事を授け給ひ、而して素戔嗚尊は勇悍強忍なるを以て、之に天下を治らせて偶神となし、頼りて以て國內を征服せんと思食しての勅旨なりと思はる。』と。

須佐之男命が、『天下を治すべし』と命せられたとしても、又は『海原をしらせ』と命せられたとしても、其れは本章に於て餘り重大な問題では無い。私は其海原が果して何れの國であるかを検討すれば宜い。久米博士は海原が新羅であることを先天的に信じて居られる様であるが、其れは甚だ牽強附會の説ではあるまいか。若し韓國或は日本の傳説に新羅を海原と呼んだ例でもあるならば兎に角、海に非らざる新羅の國を何故に海原と言つたか、其理由は分らない。何の理由も無く唯だ自分の

都合の宜い様に歴史を読むのは甚だ無責任と言はねばならぬ。

第三、ベルシヤ灣頭の『海の國』

然るにカルデヤ最古代史を讀むと、私が須佐之男命の故郷だとするシユス（或はスサ）の都の南方を『海の國』と稱した。太古に於ては、彼のベルシヤ灣は今日よりは餘程西北方面に深入してゐて、スサの都の如きも頗る海に接近して居たといふ。又今日のバヌラ、コルナ等の都市地は尙ほ海底にあつたのである。そしてバビロン王朝の前紀に於て此海邊は廣い沼澤地を爲し、其地方住民の生活状態も一特徴を帯びて居た。當時此地方を『海の國』と呼んだのも之が爲であつたろう。殊に私をして深い興味を感せしめるのは、バビロン人が此地方を『海の國』と呼ぶと同時に、又『叛逆の國』といふ綽名を興へたことである。海の國の攻撃によつてバビロン王朝の苦しめられ、又其領土を蠶食されたことは歴史の屢々記する處である。バビロ

ン第一王朝は此『海國人』に依つて滅ぼされずして却て彼のヒツチトに依つて滅ぼされたのであるが、兎に角、『海の國』が一時非常な努力を持つてユウフララスの上流に登つて來たことは事實である。

處が古事記神話に於ては、此『海原』を領地として興へられた須佐之男命が、大和民族に於ける最初の叛逆暴動者となつて居る。バビロンの古代史に於て、海の國が、同時に叛逆の國の稱を受けたのと對照して見ると極めて興味深い。そして久米博士とは反對に、其紀が引用した第六書の紀事よりも、古事記の記事の方が、私には興味が深い。第六書の『月讀命は滄海原、潮の八百重を治すべし』との一句も矢張り古事記の『夜の食國フスクニをしらせ』といふ方が面白い。文字の上から言つても、月讀命が夜の食國に向けられ、スサの男命が其スサの近傍なる海原ウミノハラに向けられたとする方が、趣味も深ければ、條理も立つて居る。

第四、須佐之男命の叛逆

古事記の記する所によるに『須佐之男命、命し給へる國を知らさずて、八拳須胸前に至るまで、啼きいさちき。其泣き給ふ状は、青山を枯山なす泣からし、河海は悉に泣乾しき。是を以て惡ぶる神の音なひ、狭蠅なす皆満き。萬の物の妖ひ悉に發りき。』ソコで伊邪那岐大神はナゼ其様に泣くかと問ふた。須佐之男命が『僕は妣の國、根之堅洲國に罷らむと欲ふが故に哭く』と答へるや、大神は大に怒りて之を追放して了つた。ソコで須佐之男命は『然らば天照大神に請して罷りなむと申給ひて乃ち天に參上ります時、山川悉に動き、國土皆震りき。こゝに天照太神聞き驚かして、我那勢の命の上り來ます由は、必ず善はしき心ならじ、我が國を奪はむと欲すにこそ』と言つて、女神は武裝して之を待つた。處が須佐之男命は一旦は言譯して女神の了解を得たので、茲に兄弟同志の二神で、彼の正勝吾勝勝速日天之忍種耳

命其他を生んだ。ソレから須佐之男命の眞の暴動が始まる。即ち『天照大御神の營田の阿はなち溝うめ、亦其大嘗きこしめす殿に糞まり散しき』といふ有様で、益々暴動が烈しくなつた。此に於て、『天照大神、見畏みて、天の石屋戸を閉て刺しこもり坐ましき。爾ち高天原皆暗く、葦原中つ國悉に闇し、此に因りて常夜往く』の状態を呈し。此に於て八百萬神の大會議が催されるのである。

カルデヤの神話創世紀中には海の徵象たるチャマトの叛亂が記されて居るが、更にバビロン時代に至りて、『海の國』が同時に『叛逆の國』といふ別名を受けて居る。古事記に於ても、『此たゞよへる國を修理かためなせ』の神勅があつて、更に海原の國の須佐之男命の叛亂が序せられてある。まことに興味が深いと言はねばならぬ。チャマト叛亂の一條に就いては、別章『三大創世記』の比較研究中に聯か所見を述べたから、本章に於ては、唯だ『海の國』に關する西洋考古學者の説を紹介して置く。

第五、シャルル・ジャン氏説

シャルル・ジャン氏 (Charles Jean) は其近著『聖書の環境』(Imilien Biblique Avant Jesus-Christ)中に記して曰く『彼の有名なる改革者(ハムラビ王を指す)の死後、僅かに百年絶つか絶たぬ内に、即ちシャマシユ・チタナの下に、ヒツチトはバビロンまで降下して同都に略奪を行ふに至つた。此冠入の爲の騒亂に乗じ、否な恐らくヒツチトの直接助力によつて、新らしい王朝、即ち『海原の國』の王朝がニツブル(?)に創立された』(同各三三頁)

第六、レオナアド・キング氏説

次に英國考古學の權威 Leonard King 氏は其著『Babylon』中に更に詳細な序述を記して居る。茲に其全部を紹介することは餘りに贅長に失するが故に、其重要な一

部分を摘録することにする。

『吾等是一種の確信を以て、サムス・イルナ(ハムラビ王の子)の新らしい難事の原因を、當時ベルシャ灣頭に興つた『海の國』の叛逆を指導し、そしてバビロンに對して我が獨立を宣言したイルマ・イルムの行動に歸することが出来ると思ふ。サムス・イルナは此新しい敵に對して新たに動員令を發し、之に向はしめた。其結果として激烈な戦闘がベルシャ灣の沿岸に於て行はれた。後日の記録によると、殺害された人體は海によつて運搬されたとある。然も尙ほ決定的の勝敗を見るに至らず、遂にバビロン人の挫折を以て終つた。思ふに王は、他の方面に於ける紛擾の結果、其叛逆を壓倒すべく充分の武力を之に注ぐことを妨げられたものであらう。何となれば其後二年間に彼はキスラ及びサブムの二都市を破壊し、バビロン國境内に於て其叛逆の頭領を破つた事實があるから。』

『イルマ・イルムは、かくて、我地位を強固にするの好機會を得た。そして恐らく彼

の勢力は南方バビロニヤに増加しつゝあつたに相違ない。其れは、テル・シフルに於て発見された文献に、サムス・イルナの治世の第十年以後のものが一ツも発見されないといふ事實に依つても明かに分る。ニツブルの中央都市が遂にイルマ・イルムの支配下に歸したといふ事實に徴すれば、彼は恐らく既に北方に侵入し、又ラルサの都市をも含める南方スメル¹の地も亦彼の掌中に歸したことが想像される。サムス・イルナが其治世第二十年に於て顛覆したと誇記する『叛逆の國』といふのは、蓋し此海原の國を指すのであろう。

『西方セミチック人の移住によつてバビロニヤの受けた壓迫が、既存住民の移轉を促したことは明白である。そして其進む方向は常に流を下るに在つた。其壓迫は其國土占領の後も尙ほ繼續した。而して之に對する唯一可能なる退却の道筋は即ち『海原の國』であつた。されば此南方の沼澤地住人は隨分長い時期の間、避難スメル入に依つて増加されたことが想像される。そして此新王國即ち海原の國の最初の三統

治者はセミチックの名稱を持つて居るし、又セミチック人であつたらうが、其後の統治者の名前によると、後に支配權を獲得したものは即ち其住民中のスメル種に屬することが察せられる。』(King of Babylon 199 = 502)

サムス・イルマから五代目のサムス・ヂタナ王を最後としてバビロンの前王朝は滅びて了つた。其れから第二の王朝が興るまでの間には、他の地方的諸王國が興つたに相違ないが、未だ其證據は発見されない。そして今日知られて居る唯一の事實は、『海の國』の王朝が連續して居たといふことだけである。

第七、暴動の事實は日本に行はれず

古事記神話に於ける須佐之男命の暴動事件は、此『海の國』のバビロンに對する叛逆を談り傳へたものではあるまいか。そして其歴史的事實に更らにカルデア古代の神話たるチャマトの叛逆や、マルヂユク大神を主とした山岳大集會などを附加し

たものではあるまいか。

殊に注意すべきは、須佐之男命の暴動が『營田の阿はなち溝うめ、亦其大嘗きこしめす殿に糞まり散ら』すにあつた事である。抑も此神話時代の日本や朝鮮に營田や溝や、大嘗きこしめす殿などが存在したとは思はれない。營田や溝やが神話中に織り込まれるには、それが其地方に非常に古くから行はれて且つ重要な社會生活の要素であらねばならぬ。されば此様な傳説が日本や朝鮮に起つたものとはドウしても思はれないであろう。然るにカルデヤは世界中最も早く米穀の耕作法と灌漑の爲の溝渠開鑿法との發達した國で、埃及の如きもカルデヤからの移住民から之を學んだのだと言はれる程である。されば此須佐之男命の暴動事實がカルデヤ地方に行はれたものと想像するのは決して不自然ではないと思ふ。従て彼の古事記の『海原』といふ地方は勿論久米博士の想像する如く新羅では無く、實にベルシャ灣頭の所謂『海の國』であると解釋することが、最も學理的であつて、且つ之に依て極め

て活々した事實を眼前に浮動せしめることが出来る。營田の阿はなちや、溝うめや、は一種の農政革命と見ることも出来るが『海原』の研究には關係の薄いことであるから、茲に論じない。唯だ繰返して言ふ。太古に於て耕田法と溝渠開鑿法との最も發達したる國は、カルデヤであるが故に、彼の須佐之男命の事件が彼の地方に於て行はれた事實或は傳説の遠く日本まで語り傳へられたものと見るのが最も學理的であると思ふ。

最後に、當時『海國』の叛逆に苦められたバビロン朝時代々の國王は『サムス』の名を必ず冠うされて居た。此『サムス』は即ち太陽の意味であると思ふ。素神に對する天照太神が太陽神であるのと思ひ合せれば、自ら合點されるであらう。

第六章 高志の國

第一、古事記神話の高志

古事記神話中に高志の國の記事が二ヶ所ある。其一は須佐之男命が出雲國に名椎一族を助ける爲に高志の八俣をろちを殺したること、其二は大國主神が高志國の沼河比賣の許に幸行した一條、是れである。そして其高志の國が所謂「越」の國であるといふことに日本の諸學者の意見は一致して居る。併し、須佐之男命の任せられた『海原』の國がベルシヤ灣頭にあり、出雲國が同灣オマン海峽兩岸にあると信ずる私は、其解釋に満足 得ない。ソコで私は、前の『古事記神話の地理』の章に於て其大體を序述した故に、茲には單に其補充として些か所見を述べて見たい。

第二、八俣蛇記事

先づ八俣をろちの事から初める。古事記の文句は次の如くである。『出雲國の肥の河上なる烏髮の地に降りましき。此時、箸其河より流れ下りき。こゝに須佐之男命、其河上に入ありけりと以爲して、尋ぎ上り往まし、かば、老夫と老女と二人ありて童女を中に置いて泣くなり。汝等は誰ぞと問ひ給へば、其老夫、僕は國つ神、大山津見神の子なり、僕が名は足名椎、妻が名は手名椎、女が名は櫛名田比賣と謂すと答す。亦汝の哭くゆえは何ぞと問給へば、我 女は本より八稚女ありき。こゝに高志の八俣をろちなも年毎に來て喫ふなる。今それ來ぬべき時なるが故に泣くと答白す其形は如何さまにかと問給へば、彼が目は赤かちなして、身一つに頭八尾八あり、亦其身に蘿又檜櫛生ひ、其長さ谿八谷、峽八峽を渡りて、其腹を見れば、悉々に常も血爛れたりと答す。』

此に於て須佐之男命は自ら名乗つて、其女との婚約を結び、其より大蛇退治の策を講じた。『足名椎、手名椎の神に告給はく、汝等、八鹽折の酒を醸み、且垣を作り廻ほし、其垣に八の門を作り、門毎に八の佐受岐を結び、其佐受岐毎に酒船を置きて、船毎に其八鹽折の酒を盛りて、待てよと詔り給ひき、かれ告給へる隨にしてかく設備へて待つ時に、其八俣をろち信に言ひしが如來つ、乃ち船毎に己頭を垂入て、其酒を飲みき、こゝに於て、飲み酔ひて死な伏し寝たり。爾ち、速須佐之男命其御佩せる十拳劔を抜きて、其蛇を切り散り給ひしかば、肥の河血になりて流れ』

第三、久米博士の説

是れに就き久米邦武博士の記する處甚だ興味があるから借用する。『八岐蛇は無論譬喩なり。此事は神武天皇の八十梟師を誅し、日本武尊の熊襲梟師を誅せられしと

同じ例にて、當時は宴會に於て驍勇の者を斬斃すを、武勇の名譽となしたりしなり。……アシナツチ、テナツチは大山津見の一族にして、雲伯の地を領したる縣主なるべし。然るに再尊の比より、北國より高志人侵入せしが、八岐蛇は其高志人の魁帥にて、簸の川の谿谷を占領して其縣主となれるものなるに、簸川の下流なる縣主の勢力弱くして毎々采女を要求せらるゝに至りたるに因て、素尊これを援けて高志人の魁帥を斬夷し、因て雲伯の地を鎮定し給ひたるなり。云々』〔大日本古代史。九六一―九七〕

第四、注意すべき點

久米博士が八俣をろちの一條を以て北國人侵入の譬喩としたのは私も同意する處である。併しながら、其北國人、即ち高志人を、何故に大蛇に譬へたか？ 此處が傳説研究の興味ある問題である。勿論越や出雲にも蛇の居らぬことにはあるまい。ケ

レども恐ろしい外人侵入に譬へられる程の大蛇が彼の寧ろ寒い地方に棲息したであらうか。我國本洲には古事記の文章が形容した様な大蛇は居ない筈である。然るにドウして此様な比喩の材料となつたのであろうか？是れが私の疑を挾む所である。

然るに私は前段に高志とは彼のカルデヤの東北方なるザグロス山に住居した『コセ』と稱する民族であることを説いた。而してコセ人の住するザグロス山が極めて險阻であつて。難越不可通の所であり、従て之に『越』の名を付するは極めて巧みなる命名法であることを説いた。又、前段にも述べた通り、ザグロは即ちアラビヤ語のザガルより由來し、其ザガルとは、即ち谿道の意味だといふ。古事記の文章が其八俣をろちを形容して、其長さ『谿八谿、峽八峽』と記したのは、恰もザグロス山其ものの形容の如く感じられて甚だ興味が深い。若し此傳説が斯くしてペルシヤ灣の邊りから傳はつたものとすれば、大蛇が侵入民族の徵象となつたのは誠にふさはしいことであると思ふ。何となれば此地方は大蛇の多く棲息する處だからである。

第五、興味ある歴史事實

更に興味ある歴史上の一事實は、此コセ人が自らは險阻なザグロス山中に立籠つて居て、そして屢々彼のペルシヤ灣頭の海原の國やバビロン等の富んだ地方に掠奪に出かけた、といふことである。シャル、ジャン氏は其著『基督以前の聖書の環境』中に記して曰く『ハムラビ王朝が凋落して約二世紀の後、『コセ人』は『海の國』を略取した。——それに就いては多くの事は知れて居ない——彼等が其首都と定めたのは即ちバビロンであつた。コセ人即ちカシユ人（或はカシ）は其初めザグロス山中に住居したものである。其國は極めて險阻險阻ではあるが、併し防禦には安全で又容易である。此強悍なる山窩等は遙かに其山を降つて豊饒なるエデンの地（メンボタミヤの地）に向ひ、其地方に掠奪して、急いで再び其難攻不落の隱遁所に獲利

品を運搬するのであつた。紀元前十八世紀の終り頃、此カシ人は不意に幽蔭から出現した。そして彼等は尙ほ半野蠻であつたにも係はらず、其王朝をバビロンに建立するの事に成効した。』(Charles-F. Jean at 'Le milieu Biblique ayant Jesus-Christ')
三三頁)

第六、大國主神の乗馬

尙ほ一ツの事實がある。其れは、大國主命が高志國に行つて、さて倭の國に上る時に、御馬に乗つたといふ事實である。神話時代の日本に果して馬が居たかドウか甚だ疑問である。何となれば、日本の古代史には多くの戦争の記事があるにも係はらず、此重要にして有力なる武器の一である馬が使用されて居ない。假令日本の國土に馬が棲息したにもせよ、其が人間の乗用に供せられないことは明かである。然るに古事記神話中に唯だポツリと馬の記事がある。尤も須佐之男命暴動の條にも「服

屋の頂を穿ちて、天の班駒を逆剝 剝ぎて墮し入る時に云々」の文字があるが、是れは恐らく驢のことであろう。太古バビロン地方に於ても馬は棲息しなかつたので普通の運搬や勞作や乗用には牛や驢が採用されたのである。家根に穴を明けて墮したのが驢ならば想像されるが、馬では小々大き過ぎる。セミチツク人の使用する驢は極めて小さく、犬の少し大きい位にしか見えないので、アレなれば家根の上に持つて行くことも出来るかと思はれる。然し其れは兎に角、日本の太古には乗用に供せられたことの無い馬に大國主命が乗られたといふ一事が私の興味を引く點である。此事は大國主命が『高志國の沼河比賣ひながなひを婚ひに幸て行し時』の記事である。即ち「其夜は會すて、明る日の夜、御合ひし給ひき、又其神(大國主)の嫡后、須勢理比賣命、甚く嫉妬し給ひき、かれ其日子ぢの神わびて、出雲より倭國に上りまさむことして、束装し立たす時に、片御手は御馬、鞍に撃け、片御足は其御笠に踏み入て云々」とある。記事は高志から出雲に、出雲から倭の國へ、の途中の物語である。抑

も何故に此處にポツリと乗馬が現はれたものであろう？ 此點に注意すべきである。

第七、コセ人は乗馬民族

バビロンの古代史を讀むと、バビロンの文明國にも馬は無かつた。物を運搬したり引いたりするには常に驢や牛を使用した。そして此文明國バビロンに初めて馬を輸入したものは、彼のザグロス山中から出て來た『コセ人』であつた。倫敦大學のアッシリオロジイの權威キング氏は言つて居る。カツシト（コセ人）は高い文化を持つて居る譯では無く、バビロンを統治するに至つても自ら徐々に其文明に應化したのである。『併し、物質的方面に於ては、彼等はバビロンの生活に大變化を齎した。其れは彼等が馬を輸入したことに基く。彼等が蓄馬の人種であつたことは疑無く、而して彼等の侵入が成効したのも其大部分は之に依つて敏活な運動力を有した

ことに基因する』と。(King's [Babylon])

セミチック人は、殊にアラビヤ人は乗馬民族として世界に有名であるが、右の記事によれば、彼等は之を『コセ人』から學んだものである。果して然らば、大國主命が高志即ち『コセ』の國に其乗馬を得、又學んだものと解することは極めて自然では無いか。古事記に、大國主命が高志國に旅した事件の中に始めて乗馬の事を記したのは深い理由がなければならぬ。

以上の諸事實を綜合して見ると、古事記の高志國とはザグロス山中の『コセ』人の國といふ意味だと解することは強ち牽絶附會の説ではなくなるであらう。

第七章 三大創世記の類似

第一、カルデヤ神話と古事記

西洋の學者は、舊約聖書の創世紀がカルデヤの神話から出て來たものと主張する。勿論舊約聖書の創世紀はヘブリユウ人が自分の社會に生長して居た宗教思想を背景にして書いたものであるから、カルデヤの自然崇拜的思想の中に談り傳へられた神話とは大ぶ其趣きを異にして居る。けれども其ヘブリユウ思想を以て書かれた創世紀の中に、カルデヤの傳説から出た多くの記事の存在することは、諸學者の間に確定した學説となつて居る。例へば創世の順序、洪水の傳説、黃泉國降下事件、の如きは兩神話中に最も著しい類似點となつて居る。

然るに日本の古事記神話を讀むと、其記事が右の二神話に類似點を持つて居るこ

とは驚くばかりである。殊に其思想は寧ろカルデヤの神話に酷似し、ヘブリユウ神話とカルデヤ神話との關係よりも一應近接して居ることが明かに覗はれる。勿論、海陸を遶く隔てた極東の小島國にまで長い旅行をして來る間には、種々の點に於て、變化があり、脱落があり、附加が行はれて居るので、不注意に古事記を讀過するものには、其類似點を發見し得ぬかも知れない。併し乍ら、若し地理學的、歴史學的な眼を以て古事記の神話を注意して讀むと、あの記事の中には、種々な地方の種々な社會の諸種の傳説や生活が編入されて居ることに氣が付くと同時に、其最も重要な中心的諸記事がカルデヤ、ヒツチト、ヘブリユウ等の傳説或は生活から山來したものであることが發見される。

併し私は本章に於て、唯だ日本、カルデヤ、ヘブリユウの三民族が後世に傳へた創世紀を比較するに留め、其地理學的、歴史學的、社會學的の比較研究は、之を他章に試みやうと思ふ。

第二、創世記の結構

古事記神代卷の記事は、天地初發の混沌状態から諸神の生成を序し、イザナギ、イザナミ二神の亂世平定を序し、次で二神の諸國創造、自然萬物創造、イザナミ神の逝去、黄泉國降下、等の諸事件に及び、更に天照太神、月讀命、須佐之男命の誕生を序して居る。そして須佐之男命の叛亂、天岩屋戸會議を以て最彼の一波瀾とし、茲に古事記神話の創世紀は一段落を吾げたと見ることが出来る。其より以後の大國主神の一條は、之を舊約書のアブラハムの記事に比すべく、天孫降下の記事は寧ろ之をエクソードに比すべきである。

カルデヤの神話にも、天地混沌の状から、諸神の生成を序し、たゞよへる世界即ちチアマトの叛亂とマルダク（或はマルデュク）神出征の状を序し、マルダク神の成功と其後の世界構造を序してある。此外黄泉國の伝説、洪水の傳説等が之に加へら

れてある。そして以上の諸傳説の趣向に於て古事記とカルデヤ傳説との間に頗る近似した處がある。ソコで私は先づ古事記とカルデヤ傳説との原文を少しく對照して見たいと思ふ。古事記の最初の記事は次の如くである。

第三、古事記神話

「天地の初發の時、高天の原に成りませる神の御名は、

天之御中主神、次に

高御産巢日神、次に

神産巢日神、

此三柱の神は皆獨り神成まして御身を隠し給ひき。

次に國稚く、浮脂の如くにして、くらげなす、たゞよへる時に、葦牙のごと萌へあがれる物に因て成りませる神の名は

ウマシアシカヒコヂノ神 次に

天之常立神

此二柱の神、亦獨り神成まして、御身を隠し給ひき。上の件五柱の神は別天神。次になりませる神の名は

國の常立神 次に

豊雲野神

此二柱の神、亦獨り神成りまして、御身を隠し給ひき。

次に成ませる神の名は

ウヒヂニノ神、次に妹、スヒヂニノ神、次に

ツヌグヒノ神、次に妹、イクグヒノ神、次に

オホトノヂノ神、次に妹、オホトノベノ神、次に

オモダルノ神、次に妹、アヤカシヨネノ神、次に

イザナギノ神、次に妹、イザナミノ神、

上の件、國の常立神より以下、イザナミノ神まで、併せて神世七代と稱す。

こゝに天ノ神諸々の命以て、イザナギノ命イザナミノ命二柱の神に、此たゞよへる國を、修理固めなせと詔りごとして、天の沼矛を賜て、言依し賜ひき。

此二柱の神、天の浮に立たして、其沼矛を指下して畫き給へば、鹽こをろ、こをろにかき鳴して、引上げ給ふ時に、其矛の末よりしたゝる鹽、つもりて島と成る。是れおのこる島なり。』

第四、カルデヤ神話

古事記の神話は、是よりイザナギ、イザナミの二神の八尋殿に於ける交合となり、諸神諸國の創造となるのであるが、對照の便を得る爲に、其は別段に分け述べることにする。そして此處には直ちにカルデヤ傳説の創世記を引照する。

「上には天に名も無かつた時、
下には地にも名が稱ばれなかつた。
是を發した最初のアブシユ(X)と
是を産んだ騷擾のチャマト(XX)とは
總ての水を混合した。
野も形を成さず葦も芽を吹なかつた。
ドンな神も産まれず、
ドンな名も呼ばれず、
ドンな運命も定まらない時に、
神々は造られた。
ラクムとラカムとは産み出された。
永い時は経過した……………」

アンシヤルとキシヤルとは造られた。
日は長くなつた……………
アヌ……………
アンシヤル……………

(註) Xアブシユは大洋或は太平洋の深淵を意味す。XXチャマトは海を意味し、
同時に騷擾を徴象する。

ハビロン人が遣したドキュメントは不幸にして此後部數句を缺いて居る。學者の説によるとカルヂヤ人は尙ほ此間に多くの諸神の産れたことを語り傳へた。『アバン(アブシユ)の配偶者トオテ(シアマト)は總ての神の母と稱せられた。此二神は獨りのモイミス(ムンム)を生んだ。是れは尙ほ無形の世界であつたらしい。是れと同様な時代が尙ほ續いた。即ち第二は、ダケとダコス、第三はキサレとアソロス、次は三神でアノス、イリノス、アオス等の名があり、アオスとドオケの子にベエロス

が生れた。其ベエロスは創造主であつたと言はれる。然るに其職分はエア神の子のベル・マルデユクが握つてゐたことはドキュメントに明記されてある。前段に掲げた詩の缺損の箇處には、天の神たるアヌの出現の後に、地の神たるベルや、海の神たるエアの出現を記してあつたのであらう。』(アルフレッド・ロマン氏 *Les Mythes Babyloniens* 第六頁参照)

さてアブシユとチャマトとは諸神に對する叛逆を謀つた。

總てを造つた黄泉の海(チャマトを意味す)は

抵抗し得ない軍兵を備へ

利がつた牙を持ちて、憐……を持たぬ

大きな蛇を産み。

其全身には血の代りに毒を充たし、

怒れるドラゴンに脅嚇の衣を着け、……

蛇や、ドラゴンや、ラクミヤ、
怪物や、狂犬や、敵人や
狂魔や、毒人や、破墻挺やを前進せしめ
何物をも吝まぬ軍兵は戦を怖れない。

第五、カルデヤの八百萬神

八百萬の神はアンシャル神の前に大集會を催して、荒ぶる海のチャマトの軍を討破すべくマルデユク太神の出征を決議した。マルデユクは武備を急いだ。愈々チャマト派とマルデユク派と大激戦となつた。マルデユクの剛力は遂に其投鎗を以てチャマトを撃破して了つた。其より天下を平定し終つて、愈々世界の組織に着手するのである。それまでの序事詩は古事記と對照すべく餘りに長いものである故に、此處には之を省略する。

バビロンの守護神マルデユク太神の出征を決議した大會議は恰も古事記の岩屋戸會議に髣髴たるものであるが、其マルデユク太神がバビロンにては男性の武神であるに、古事記の天照太神が愛の女神である點は頗る異つて居る。そしてカルデアにては叛亂のチャマトが女性であるに反して、日本の古事記にては叛亂のスサノヲノ命は勇猛の男神である。是れは恐らくヒツナト民族に傳つた女性崇拜の信仰と混合してそれが日本に傳來したのである。兎に角、春の太陽の徵象とされるマルデユクが其隠逃所たる山陰にて八百萬の神と出征前の評議を凝らしたといふ神話は頗る古事記の岩屋戸會議に近似して居る。(岩屋戸會議の神話 學的研究の章參照)此記事が古事記にては大分後方におり、創世の後に挿入せられた爲に前後の關係が少し異つたに過ぎない。

古事記神話のイザナギ、イザナミ二神の條には「たゞよへる國をつくり固めなせ」といふ諸神の言葉があるばかりで、カルデア神話のチャマト叛亂に相當する記事が無い。又従つて之に對する戦闘も無く、唯だ「二柱の神、天の浮橋に立して、其沼

矛を指下して、かき給へば、云々」とありて、極めて無造作に諸國、諸物、諸神の創造が始められてある。是れは岩屋戸會議の記事を後方に送つた編纂の順序として、茲には單に「たゞよへる國」と言ひ、「沼矛を指下してかき給へば」と序して、戦亂の序述に代へたものであらう。

第六、舊約聖書の創世記

さて、古事記神話並びにカルデア神話と舊約書の創世記とを比較すると其趣は大分異つて居る。其れはヘブリユウの思想が當時既に一神教を信じて居たことも原因として居るであらう。カルデア神話や古事記の様に八百萬の神の會議などと言ふことも無く、諸神生成の序事も存在しない。ヘブリユウの舊約聖書の初頁には次の様な記事がある。

『元始に神天地を創造りたまへり。地は定形なく、曠空くして、黑暗淵の面にあ

細胞から
進化と云ふ
言ふ進化論
に反してゐる。
即ち下等
動物植物は
細胞より
進化して
人類が
出た
と云ふ
説は

り、神の靈、水の面を覆ひたりき。神光あれと言ひたまひければ光ありき。神光を善しと觀たまへり。神光と暗を分ちたまへり。神光を晝と名け、暗を夜と名けたまへり。夕あり朝ありき。是れ首の日なり。神言ひたまひけるは、水の中に穹蒼ありて水と水を分つべし。神穹蒼を作りて穹蒼の下の水と穹蒼の上の水を別ちたまへり。即ち斯くなりぬ。……神言ひ給ひけるは、我儕に象りて我儕の像の如くに我儕人を造り、之に海の魚と、天空の鳥と、家畜と全地と、地に匍ふ所の諸の昆蟲を治めしめんと。神其像の如くに人に創造りたまへり。即ち神の像の如くに之をつくり、男と女に創造りたまへり。神彼等を祝し、神彼等に言ひたまひけるは、生めよ繁忙よ地に満盈よ、之を従服せよ、又海の魚と天空の鳥と地に動く所の諸の生物を治めよ、云々』

かくてエホバ神は『土の塵を以て人を造り、生の氣を其鼻に吹入れたまへり』是れがアダムの事。エホバ神は其アダムの、エデンの東方に設けた園に置いた。そ

して『エホバ神、其人に命じて言ひたまひけるは、園の各種の樹の果は汝意のままに食ふことを得、然れど善惡を知る。樹は汝その果を食ふべからず。汝之を食ふ日には必ず死ぬべければなり。エホバ神は、アダムの妻は智慧の實のなる樹を見つて女を成つた。其れはアダムの妻となつた。アダムの妻は智慧の實のなる樹を見て其誘惑にまけた。そして先づ自ら之を食ひ、次で之を其夫に與へた。之に因つてアダムと其妻エバとはエデンの園から追はれた。其れから人類は繁殖したが、神は其墮落の狀を憎んで、遂に大洪水を來らした。それがノアの洪水である。然るに其大洪水で救はれたノアの子孫は又繁昌した。そしてソドムとゴモラとの人民は再び神の怒りに觸れて大天災を下されて滅亡した。』

第七、洪水の傳説

此大洪水の傳説がカルデヤの傳説から出たものであることは諸學者の一致する處

である。カルデヤの洪水傳説は随分長い英雄物語的の史詩を成して居る。前のチャマトの傳説も海の徴象が叛亂をするので、洪水・殆ど同じ様な意義を持つたものと解釋することが出来る。舊約聖書にノアの洪水とソドム、ゴモラの大天災を記すのと同様である。

古事記神話中には、最初にイザナギ、イザナミの二神が天の沼矛を以て、たゞよへる國を修理したといふ簡単な記事があり。次に須佐之男命が、「よさし給へる國を知らさずして、八拳鬚むなさに至るまで、なきいさちき、其泣き給ふ状は、青山を枯山なす泣からし、河海は悉々に泣き乾しき。是を以て惡ぶる神の音なひ、狭蠅なす皆満き。萬の物の妖ひ悉々に發りき」といふ社會騷亂の歴史を傳へて居る。此記事は恰もカルデヤ傳説のチャマト叛亂にも類し、又、スサノヲノ命が我が所命の海原を知らさずして騷亂する様は洪水傳説の轉化せしものと見ることが出来る。古事記編纂時代の日本には大洪水を以て萬民滅亡を來らす程の大河川無く、從て洪水

の傳説を其儘編入することが出来なかつたのであろう。前の「たゞよへる國」の記事も洪水の傳説と見ることが出来るにも係はらず、頗る簡單なのである。又、スサノヲノ命は再々叛亂を行つて居るが、此處には聊かも洪水的の記事を留めないで、寧ろ此一條こそカルデヤのチャマト叛亂の傳説に酷似して居るのである。即ちスサノヲノ命が「勝さびに、天照大御神の營田の阿離ち、溝埋め、亦其大嘗考しめす殿に糞まり散し……天照大御神忌服屋に坐まして、神御衣をらしめ給ふ時に、其服屋の頂を穿ちて、天の斑馬を逆剝に剝ぎて、墮し入る時に、天の衣織女見驚きて、梭に陰上を衝きて死にき。是に天照大御神、見かしこみて、天の石屋戸を閉てて、刺しこもり坐ましき。すなはち、高天の原皆暗く、葦原の中つ國悉々に闇し。此に因りて常夜往く。是に萬の神の大聲は、狭蠅なす皆わき。萬の妖ひことごとくに發りき」といふ記事は、殘暴なチャマト叛亂に酷似するのである。

そして前にも言ふた通り、チャマト征服の武神マルデュクが山陰に匿れて八百萬

の神と出征の評議を凝らした事件は、恰も天照大神の石屋戸會議に髣髴し、春の太陽たるマルデユクの勝利は同じ太陽たる天照大御神の石屋戸より出現したる光景と對比することが出来る。

舊約聖書の創世記にては、エホバ神は、最初アダムとエバとが智慧の果を喰つたのを憤つて、彼等をエデンの園から放逐し、次で大洪水を送つてノア一族の外は總ての人類を罪惡の塊りだとして滅して了ひ、更らにソドムとゴモラの人民はエホバ神の激怒に觸れて殄滅せしめられた。然るにカルデヤのチャマト叛亂や洪水の傳説にも、又古事記のスサノオの命の事件にも、天神が人民を懲戒するといふ意味は聊かも含まれて居ない。粗暴野蠻の状態は可なりに現はれて居るが、然し至つて單純で小供らしい事件である。殊にカルデヤの傳説も、日本古事記の神話も、此大問題を決するに八百萬の神の大會議を以てした點は、一神教たるヘブリユウの傳説と甚だしく其趣を異にして居る。

第八、世界創造の順序

サテ、武勇にして春の太陽を徵象するマルデユク神は、チャマトを征服した後、萬物の創造に着手した。先づ天の諸星を整理して一年を十二ヶ月に定め、七日を以て半月冠を造り、十四日にして満月冠を現はした。世界最古の陰曆は是から始まつたのである。更に彼は其れからバビロンを創造した。

『マルデユクは諸水の前に堤防を築いた。

彼は塵埃を造つて堤防の近傍に撒布した。

諸の神を心地よき住居に在らしめる爲に

彼は人間を造つた。

アルルは彼と共に人間の種を造つた。

アルルは女神である。バビロンの半歴史的、半神話的の人物ジルガメスの詩中にも

アルルの名は出て来る。ジルガメスの同伴者エアバニを造つた者は即ちアルル女神である。アルル女神は、アヌ神の憐れを其心の中に形づくり、其手を洗ひ浄め、粘土を捏ねて其れを地上に投げた。かくして女神は元氣あるエアバニを造つた。さればエアバニは、舊約書のエホバ神が土を以て造つたアダムの模型をなすといふても宜しかろう。神の詩は尙ほ續く。

彼(マルデユク)は野の獸物や凡そ田舎に生活する總てのものを造つた。

彼はチグリスとユウフラテスとを造つて、之を其地位に置へた。

彼は歡びを以て其等の名を呼んだ。

彼は芝生や、牧場の草や、葦や、樹木を造つた。

彼は野の草木を造り、

國々や、牧場や、

牝牛や、仔牛や、牝羊や、仔羊や、

森や、林や、を造つた。

マルデユク神は、煉瓦を重ねて壁を造り、家を作り、町を建て、町に群衆を置き、

ニツブルを造り、エキユルを建て、エレクを作り、エアナを建てた。(Toisy Les M

yles Babyloniens] 六五頁参照)

カルデヤ神話にては、マルデユク大神が、アルル女神と共に造りたるは勇者エアバニだけで、他の一切の創造はマルデユク神が獨りで行つた。然るに古事記神話に於ては之と全然反對で、イザナギ神はイザナミ神と交合して諸國諸神諸物を創造し、唯だ最後に獨りにて天照太神と月讀命と須佐之男命とを生ませられた。古事記神話中最も重要な地位を占めて居る此三柱の神がカルデヤのエアバニの誕生と反對に男神のみより生れたのに奇である。唯だエアバニを産むべくアルル女神が先づ手を洗つたのに對して、イザナギの命は先づ身を滌ぎ、左眼を洗つた時に天照大神が生成し、右眼を洗つた時に月讀命が生成し、鼻を洗つた時に建速須佐之男命が生れ

たといふ。アルル女神も、イザナギ男神も、共に身を清めた處に深い意味が潜んで居る。

第九、古事記の創造説

イザナギ、イザナミ二神は、天神より受けた天の沼矛を以てオノゴロ島を造り、『其島に天降りまして、天の御柱を見立て、八尋殿を見立て給ひき』といふ。之から結婚式になる。

『こゝに其妹、イザナミの命に、汝が身は如何に成れると問ひ給へば、吾が身は成り成りて、成り合はざる處一處ありと曰し給ひき。』

ここにイザナギの命のり給ひつらく、我が身は成り成りて成り餘れる處一處あり。かれ此吾身の成り餘れる處を、汝が身の成合はざる處に刺しふさぎて、國土生み成さんとおもふは奈何にと詔り給へば、イザナミの命、しか善けんと曰し給ひき。

こゝにイザナギ 命、然らば吾と汝と是の天の御柱を歩き廻り逢ひて、みごのまぐはひ爲せと詔り給ひき。

かく言ひ期りて、乃はち汝は右より廻り逢へ、我は左より廻り逢むと詔り給ひ、約り竟て廻ります時に、イザナミの命、先づアナニヤシエヲトコヲと言ひ給ひ、後にイザナギの命、アナニヤシエヲトソヲと言ひ給ひき。』

こうして二神は日本史上最初の男女交合を試みたが、最初のは成就せず、水蛭子を生み給ひ、此子は葦船に入れて流しすてた。是れは舊約書のモオゼが葦船にて棄てられたことヲ思ひ出させる。イザナギ、イザナミ二神は更にヤリ直しを行つて今度は成功した。そして諸島國を生んだ。之を大八島國といふ。二神は國を生み竟へて更に諸物諸神を生みました。

『次に海神、名は大綿津見神を生みまし、』

次に水戸神、名は速秋津日子神

次に妹、速秋津比賣神を生みまひき。

次に風神、名は志那都比古神を生みます。

次に木神、名は久久能智神を生みます。

次に山神、名は大山津見神を生みます。

次に野神、名は鹿屋野比賣神を生みます。

次に生みませる神の名は、鳥之石楠船神、亦の名は天之鳥船と謂す。

次に大宜都比賣神を生みまひ、

次に火のやぎはやをの神を生みます。

此創造の順序や状態が、カルデヤのマルデュク神の其れと符節を合す如くであることは不思議なほどに感せられるであろう。此内、天の鳥船は多分交通の神であろう。

大宜都比賣は食物或は農業の神であらう。何となれば須佐之男命に關聯して次の如き記事があるからである。『こゝに大げつひめの鼻口又は尻より種々の味物たあものを取出て、種々作り具へて、奉る時に、須佐之男命、其態しわざを立ち伺ひて、きたなきもの奉ると思はして、乃ち其大げつひめの神を殺し給ひき、かれ殺さへ給へる神の身に成れる物は、頭に蠶生り、二つの目に稻穗生り、二つの耳に粟生り、鼻に小豆生り、陰ほとに麥生り、尻に大豆あずきりき。かれ是に、神産巢日御祖の命、これを取らして、種となし給ひき。』

以上に序述した如く、カルデヤ神話の創世記と日本古事記の創世記とは、其の順序に於て、其思想に於て、極めて類似したものであることは何人も疑ふことが出来ぬであろう。西洋の學者は、ヘブリユウの創世記がカルデヤの神話から出たと信じて居るが、古事記神話がカルデヤ創世記に近いことは、ヘブリユウの其れよりも勝るのである。

第一〇、八尋殿の交合

本章を終るに當りて、尙ほ一事の記すべきことがある。其れは前にも掲げた、イザナギ、ナザナミの兩神の『ミトノマクハヒ』の一條に就いてである。古事記に曰く。『其島(オノゴロシマ)に天降(あま)りて、天の御柱を見立て、八尋殿を見立て給ひき。こゝに(イザナギの命)其妹イザナミの命に、汝が身はいかに成れると問ひ給へば、吾身は成り成りて成り合はざる處一處あり、と曰し給ひき。こゝにイザナギの命のり給ひつらく。我身は成り成りて成り餘れる處一處あり、かれ此吾身の成り餘れる處を、汝が身の成り合はざる處に刺し塞ぎて、國土生み成さんとおもふは奈何にと詔り給へば、イザナミの命、しか善けんといひ給ひき。こゝにイザナギの命、然らば吾と汝と是天の御柱一行き廻り逢ひて、ミトノマクハヒなせと詔り給ひき。かく言ひ期りて、乃ち汝は右より廻り逢へ、我は左より廻り逢はむと

詔り給ひ云々』

此記事に對し、久米邦武氏は『マクハヒとは上國下國合體の約の成りたるに喩ふ。其時二尊が柱を左旋し右旋せし事を記したるは陰陽説の附會にて取るに足らず』と苦も無く叩き付けて居る。久米邦武氏のように、何もかも戦争ごっこや我利我利亡者の政略運動と解釋されては、古事記の記者の靈も一千數百年後の今日を振り返つて、さぞ泣いて居るであらう。久米博士の様に解釋されては、アの美しい詩、アの無邪氣な神話もメチャクチャである。勇武無邪氣にして同時に詩情に富んだ天孫民族の特徴といふものは總て破壊されて了ふ譯である。私は此美しい記事は、其文字の儘に解釋して、之に依つて上古の天孫民族の生活を覗ひ、古事記記者の眞摯な態度を讚美したいと思ふ。

柱或は神木を廻りて結婚式を行ふ風俗は、三千年以前からヒンドウクツシユの谿谷地方に行はれて居た事實である。そして其ヒンドウクツシユはカルデヤの隣接地

といふても可い地方である。此風俗は他の諸事實と共に日本に傳はつたものと見ることが出来るかも知れない。エリゼ・ルクリュは『地人論』中に右の印度の風俗を記して曰く。

『結婚に最も大きな格式を與へる儀式は、樹木や雜草に古い友情を證明することである。其原始的な徵象に於て、蓮の蕾や花や、果實や、花束や、花飾りや、喬木或は灌木は、人間の上に同情友愛を注ぐものだといふ意味を表はす。若き乙女は自ら小さな灌木の妹と考へ、其愛人を以て立派な大木の兄弟と信ずる。……從て結婚に際しては、乙女は先づ花冠を着け、手に葉と果を携へて、幾度か一の神木を廻る。是と同時に、其戀人は種々な抱擁の身振りをして他の神木を刺激する』(Reclus 氏 『l'homme et la terre』 第三卷一四六頁)

此の如き詩的な生活事實が言ひ傳へられ、或は行ひ傳へられて古事記の記事となつたと見ることは、決して無意味では無いと思ふ。併し尙ほアの『柱』はカルデヤ

神話中で最も大きな感化を西方亞細亞に與へた『アシラ像』から由來したものであるかも知れない。舊約聖書に出て居る『アシラ像』は即ち女性を徵象化したものである。

自昔懷清賞。 神遊香露間。
如今不是夢。 眞箇是虛山。

第八章 黄泉國の傳説

第一、古事記の記事

古事記神話によると、イザナミの命はイザナギの命と共に諸國諸神を生みたる後、火のカグツチの神を生んだが『此子を生ますにより、ミホト炙かえて病臥せり。：火神を生ませるに因て、遂に神さりましぬ』然るにイザナギの神は、其最愛の女神戀しさに黄泉國よみつくくにに尋ねて行つた。古事記は其時の光景を次の如くに書いて居る。此記事が如何にもカルデアの神話に似て居る故に、私は之を比較して見たいと思ふのである。

『こゝに其妹伊邪那美命を相見まく欲して、黄泉國に追ひ往でましき。すなはち殿のど騰戸より出向へます時に、イザナギの命語らひ給はく。愛しき我なもの命、吾

と汝と作りりし國、いまだ作り竟へずあれば、還へりまさねと詔り給ひき。

『こゝにイザナミの命答へ給はく、悔しきかも速く來まさすて、吾は黄泉戸へむ喫しつ然れども、愛しき我なせの命、入來ませる事、かしこければ、還りなんを、まづ具らかに黄泉神と相論らはん。我をな見給ひそ、かく白して、其殿内に還り入り坐せる間、甚久しくて待かね給ひき。

かれ、左のみづらに刺せる、ゆづつまくしの男柱一つ取り闕きて、一つ火燭して、入見ます時に、うじたかれとろろぎて、御頭には大雷居り、御胸には火の雷居り、……合せてやぐさいかづち雷神成居りき。

『こゝにイザナギの命、見畏みて、逃返ります時に、其妹イザナミの命、吾に辱見せ給ひつと言し給ひ、やがてヨモツシコメを遣はして、追はしめき。

……
『また、後には。かの八種の雷神に千五百の黄泉軍を副て追はしめき。

第二、久米邦武氏の所説

日本古代史の權威久米邦武氏は、此記事を以て、^{ナギ}諾尊の出雲鎮定の計畫を記したるものごなし。『火の神の一段は、其が原因となりて上國下國の合和が破壊となりたることの譬喩なるは明かなれども、之を事實として解するには参考の料なきに苦しむなり。火神はたゞ海川以下の例を推して亦伴造國造の一なるを知る。冉命（イザナミ）の本國たる出雲の急要地に變を生じたるによつて、冉尊は耦神の位をすてて遽に歸國ありたるを、神さり給ふに譬へたるものと見る解釋は大方は違はじ』『諾尊（イザナギ）は火神の處分に時日を移し、兵を隨へて出雲の鎮服に赴き給へば、出雲の激黨は既に冉尊を要して反抗せん事を決し云々』と述べて居る（日本時代史古代上七一、二）是れは決して平凡な解釋ではない。古代人の神話的感情を無視して、政治的な、近代的な、巧利主義的な解釋と想像とを無限に延長するならば右の如き意

味も出て來るであらう。併し、古事記の文章中、唯だ『千五百の黄泉軍』といふ文字のみが些か戦争を想像せしむるの資料となるばかりで、其他の點には其様な想像を喚起すべき文字は一つも無い。又假令、久米氏の如き解釋を施した處で、然らば、何故に右の如き政治的の事件に『黄泉國』だの『神さり』だのといふ譬喩を借りて來たか？ といふ疑問が起つて來る。是れは如何に解釋すべきであらうか。古事記の註釋中には、黄泉國の思想は印度佛教思想から由來したのだと説いたのがある。或はそうかも知れない。ケレども、古事記に表はれた黄泉國の思想には決して宗教的色彩が出て居ない。アレは全然ブリミチーフな民族の思想で、寧ろ佛教や基督教の地獄思想の起原をなしたものと知るべきである。

第三、カルデヤ神話

然るに其佛教や基督教の思想の本源が何れもカルデヤに存し、そして其カルデヤ

神話中に、古事記の黄泉國と殆ど全然一致すると思はれる様な事實があるのは驚くべきである。そこで私は茲にカルデア神話中の一部を摘録して見やうと思ふ。其神話はイシユタル女神が若き戀神タムヅを慕ふて黄泉國の門に到着し、茲で英雄神シルガメスの爲に拒否されるといふ筋である。古事記の方では黄泉國に下つたものは女神で之を慕ふて行つたイザナギ神が男になつて居て男女が轉倒して居るが、事情は極めて類似して居る。

『誰一人歸つて來ない國、暗黒の場所に、

シン(シンは支那語の神の起原ならん)の娘イシユタルは意を傾けた。

イルカラ神の坐所、暗黒の館に

一度入れば出づること無き家に

一度通過すれば歸へることなき道に

其訪問者は必ず光明を絶たるゝ家に

塵埃をバンとし泥濘を食料とする所に
シンの娘は意を傾けた。

.....

不歸國の門に近いて、イシユタルは

其門番に言葉をかけた

オ、門番よ、汝の門を開け！

お前の門を開け、私が這入れる様に、

若しもお前が、私を入れぬ爲に、其門を開かぬならば

私は其扉を打ち其門を破壊するであらう。

私は其闕を破り、其扉を打放すであらう。

私は死を復興し之に喰しめ生かすであらう。

.....

門番は口を開き女王イシユタルに曰ふ、

「待たれよ、オー、貴婦人！」

何とぞ其處を壊さない様に！、

私をして、御名をアラツ女王に通じしめ給へ。」

(King of First Step in Assyrian] 一八二頁—一八五頁、楔形文字註釋より摘録す)

其不歸暗黒な國の狀態は、古事記黄泉國の狀態に髣髴たるものがある。「訪問者は必ず光明を絶たれ、塵埃をバンとし泥濘を食とする」有様は、黄泉國の「一つ火ともして、入見ます時に、蛆たかれ、とろろぎて(ミろろぎは、トロケテ)……八の雷(ヤタ)、神成り居りき」といふに殆ど同じである。

第四、イシユタル女神

次にイシタル女神がジルガメスと戀の問答をする件へたがある。是れが果して黄泉國

の事件の續きであるかドウか判然せぬが、併し、其中にイシタル女神の若き時の配偶タムヅ神に關する問答が行はれて居る。そしてジルガメスは遂にイシユタル女神を受け容れないで之を追還へして居る。此イシユタル女神の戀人タムヅは太陽神で其太陽神が暗黒の國に隠れたといふことは、古事記の天照大神岩屋戸御閉居と同様な意味が含まれて居る。併し、天の岩屋戸會議の事實は寧ろカルデア神話のマルデュク神が山陰にて八百萬神と軍議を凝したといふ方に近似して居るのである。多くの時と處とを隔てて傳はつた神話であるが故に、甲の一事實が乙話に混入し、乙の一事實が甲の方に入り、或は二事件中に分出され、或は二事件が一事件となつて混成された點もあろう。是れはヘブリユウの舊約神話とカルデア神話との關係に於ても極めて屢々發見される事件である。

イシユタル女神が傳說的又は宗教的に西方亞細亞に残した印象は頗る大きなもので、シリヤ、パレスチン、小亞細亞等の神話、傳説、宗教を研究する者に取りては

極めて重大な問題となつて居る。是れに就き英國ヒツチトロロジイの權威サイヌ博士は次の如く言ふて居る。

第五、女神と西方亞細亞

『埃及王ラムゼスとカデシの王とが締結した條約文に由ると、ヒツチトの最高神は *Sutekh* と稱ばれ女神は *Anturta* と言ふ。セミチツクの *Ashtoreth* である。然るに其後になつてカルケミシの女神は *Atar Ahi* といふ名前でも知られて居る。之を希臘人は *Aiargabis* とか *Darkeo* といふ様な風に變へて了つた。而してデルケトはセミラミスの だなどとは訛傳され、其セミラミスは又アツシリヤ女王であるなどと希臘人に傳へられた。併し其セミラミスとは實際イシュタル女神のことで、カナ人は之をアシトレトと呼び、カルケミシのアラメヤは之をアタルと名づけたのである。デルケトはセミラミスの別名で、此名に依り此亞細亞の女神が傳へられたので

ある。鳩は此女神に奉獻された。……デケルトはフリジヤにてはキベレ或はキベベといふ名で知られ、『大祖母』の稱號を以て崇拜された。其像は乳房を以て蔽はれて居る。其れは人類が其生命の資料を搾出す所の母地を徵象する爲である。此女神の諸性質は、バビロニアのイシュタル、カナンのアシトレトから借り來つたものである。カルケミシにて發見されたる浮彫は、裸體にて、高き冠を戴き、兩手を兩乳房の上に置き、兩肩の背後から羽翼がそびえて居る。此女神がヒツチト人の上に大勢力を有つて居たことは、是れバビロニア宗教が此民族の上に及ぼした感化を物語るので、又従つて、此民族に依つて小亞細亞の人民の上に傳播されたことを明かにするのである。……バビロニアのイシュタル女神は、其子にして花婿たる若き太陽神のタムヅを伴ふて居る。此神の天折の神話は民衆の心裡に深い印象を與へた。ゼルサレムに於てすら、エゼキルは、其神殿の扉の内に、タムヅの死を悲しむ婦人の落涙して居るのを見たほどである。シリヤにてはタムヅ神はハダドと稱ばれ、リムモン

神と同一視せられる。ゼカリヤがメジドの谷に於けるハダト・リムモンに就いて談つたのも是れである（撒加利亞書第十二章一一節）』

第六、アシラと柱

イシユタル女神がヒツチト民族によりて遠く小亞細亞及びパレスチンにまで其勢力を及ぼしたことは前述の如くである。此イシユタル（或はイスタル）女神がゼルサレム神殿に位を占めて Asherah と呼ばれたことは學者の信する處である。（第十七章）そして此アシラの語こそ、日本に傳はつて『柱』となつたのだといふ人のあることを私は聞いた。古事記に幾柱の神などいふ其柱である。諸神を數へる言葉である。私は本書『第十一章天孫民族』中に柱の語はヒツチトの形象文字から由來したのであらうと説いたが、若し其形象文字と『アシラ』の語とを照合したならば此間に新しい發見をなし得るかも知れないと思ふ。聖書にあるアシラ像と言ふは如何なる形體を

持つたものであるか。其像とヒツチトの形象文字とは果して何等の關係もないか。是れも興味ある問題である。併し、今日は唯だ此問題を遺すだけで其研究を進める時間を持つて居ない。

第七、地獄思想の傳播

イシユタル女神の神話と同時に、黄泉國の思想も諸方に傳はつた。殊にヘブリユウ民族の思想中に深入したことは諸學者の共に信する處である。ヘブリユウ民族にとりては、埃及は黄泉國或は地獄と同様に見られた。アブラハムもモオゼも此國を脱出して居る。カルデヤの黄泉國思想を埃及に適用したのだらうと學者は言ふ、ヘブリユウ民族思想の特徴たる神罰の對象となつたソドムとゴモラの譬喩も正しくカルデヤの地獄思想を借りたのだと言はれる。佛教の地獄思想がカルデヤから傳はつたことも亦學者の疑はない處である。

以上序述した處の事實は、人をして黄泉國の思想がカルデヤから出て來たことに合點せしむるであらう。其傳達者が誰であつても、或はヒツチト民族、或はセミチツク人、或はマンイ人、或は又バクトリヤ人、何れであつても、兎に角、其起原をカルデヤに發したことは蓋し疑はれぬであらう。

湖上移魚子。

初生不畏人。

自從識鈎餌。

欲見更無因。

第九章 四つの結婚の類似

第一、四つの結婚

私は第十二章『出雲民族』中に於て、大國主神はイスラエル人のアブラハムであると書いた。大國主神が其後裔に大三輪氏を有して、日本の宗教々權を一族に集め有した點も、アブラハムの後としてふさわしいことである。然るにアブラハムの子イサク及び其子エソウ及びヤコブの傳記と古事記の穗手耳命及びニニギの命の生涯とに多くの類似點を存して居ることは更に驚くばかりである。

日子穗々手耳命即ち火遠理命は其兄火照命との間に、海さち山さちの事に就いて争ひを生じ、鹽椎の神の助言を得て、海神の女豊玉比賣と婚を結ぶに至る。然るに其結婚の媒介となるのが井であつた點がアブラハムの子、イサクの結婚の場合と全

然其光景を同じくし、そしてイサクの子のエソウとヤコブとの相續争ひが、火照、火遠理二尊の相續争ひと頗る似寄つて居るのである。

更に又、ヤコブとラバンの二人娘との結婚事件と、ニギギの命の大山津見神の二人娘に對する關係が符節を合せた如くなのも不思議なほどである。

第二、穗々手耳命

私は先づ古事記の記事を拔萃して穗々手耳命の相續争議のことより結婚の一條に至る大略を示し、それから之に比すべき舊約書の記事を紹介し、最後に些か私の註解を加へやうと思ふ。古事記は記して曰く、

「火照命は、海さち比古として、鰭廣物、鰭狭物を取り給ひ、火遠理命は、山さち比古として、毛麤物、毛柔物を取り給ひき。こゝに火遠理命、其兄火照命に、各みに佐知を易へて用ひてむといひて、三度乞はししかども、許さざりき。然ども

遂に纒かに得かへ給ひき。

かれ火遠理命、海佐知を以て魚釣すに、都て一魚も得給はず。亦其釣をさへ海に失ひ給ひき。

こゝに其兄火照命、其釣を乞ひて、……今は各々佐知返へさむと謂、時に、其弟火遠理命答り曰く、汝の釣は魚釣りしに一魚も得ずて、遂に海に失ひてきと詔り給へども、其兄あながちに乞ひはたりき。

……
こゝに其弟、海邊に泣き患ひ居ます時に、鹽椎の神來て問ひけらく、……鹽椎の神、我汝命の爲に善き議りせんといひて、即ち無間勝間の小船を造りて其船に載せ奉りて、教へけらく、我其船を押流せば、やゝ暫し往ませ、うまし御路あらむ。乃ち其道に乗り、往ましなば、魚鱗の如造れる宮室、それ綿津見神の宮なり。其神の御門に到りましなば、榜の井の上に湯津香木あらん。其木の上に坐ませば、